ベルリン大会・速報①

2010年6月16日

○本人のための準備会議

9：00〜11：00

アクセシブルレベル　AAA

通訳　あり

＜　プレ会議ってなに？　＞

会議をはじめる前に、「本人のための準備会議」が行われました。この会議は、大会がはじまる前日に参加者である障害のある本人が、今回のドイツ・ベルリン大会のテーマ、大会の流れなどを理解するためのものです。全体の参加者はドイツ、カナダ、日本、ニュージーランドなど50名ほどでした。

＜　大会前のコミュニケーション　＞

まずはじめに、この会議に参加しているさまざまな国の人たちが混ざって、7〜10人くらいのグループに分かれ、名前、自分がどこの国から来たのか、ベルリン大会に参加した理由などを発表しました。こうした自己紹介をすることで、違った国から参加した人たち同士でコミュニケーションをとり、この「本人のための準備会議」が、ドイツ・ベルリン大会全体がスムーズに進むことを目的にしています（写真・右）。

話し合いのなかでは、たとえばこんな議論がおこなわれます。

・同じような障害をもっている、他の国の人の話を聞きたい

・今回は、ドイツやカナダ、日本など、豊かなと言われている国の人の参加が多いけれど、差別や虐待など、どこも同じような問題を抱えている気がする

・障害のある人が自分らしく生きられない、経済的に豊かでも、ほんとうに豊かって言えるのだろうか

＜　三塚さんがスピーチ　＞

次に、事前に決められていた主な参加国のなかの代表者が、「本人のための準備会議」の参加者全員のまえで、自己紹介をしました。日本の代表は、北海道・札幌から参加した三塚さんです。三塚さんは自分が「スワンベーカリー」というパン屋で働いていること、前回のメキシコ

大会に参加していた仲間とベルリン大会で再会できてうれしいとスピーチしました（写真・下）。

コラム　フェイスブックって知ってる？

世界中で「フェイスブック」と呼ばれるインターネットのサイトが流行しています。そこでは、自分のプロフィールや顔写真をインターネット上にのせることができ、そのページに訪れる人たちと交流することができ、障害のある人たちにも人気が高いそうです。

○本人のための戦略会議

アクセシブルレベル　AAA　　通訳　あり

＜　ワークショップのルール　＞

参加者全員、名前やどこの国から来たのか、世界大会に何回参加したのか、など一人ひとり簡単に自己紹介をしました。参加者の中には、今回初めて参加する人で飛行機に乗ったのも初めてだった人から、世界会議に４回も参加している人、この大会で学んでこれから生かしていきたいなど、それぞれの思いを伝えていました。

＜　みんなどこから来たの？　＞

このワークショップの参加した人は・・・。

コロンビア　ニュージーランド
カナダ　　エクアドル共和国
アイルランド
コスタリカ共和国
メキシコ
日本
ポーランド
フランス
レバノン
オランダ

＜　セルフアドボカシー　＞

ワークショップを担当していたオランダの支援者が、「セルフアドボカシー（本人活動）」のことを話し合う前に、事前に“参加者で話し合うときの決まりごと（ガイドライン）を決めよう”という提案がありました。

・携帯電話の電源は切る　・一人ひとりを尊重しよう　・発言するときは手をあげて知らせよう
・人の発言は終わりまで聞こう　・お互い助け合い　・時間を十分与えよう
・しっかりしゃべろう

ベルリン大会・速報②

2010年６月17日

○全体会１・開会式

「すべての人にインクルージョンを　国連の障害者の権利条約の挑戦」

10：00～12：30

アクセシブルレベル　AA

通訳　あり

＜　ようこそ！　ドイツ・ベルリン大会へ　＞

まずはじめに、ダイアン・リッチラーさん（カナダ）から、大会のあいさつがありました。

「全世界の障害のある人たちが、共通に自分らしく生きていくためのレシピが必要です。それが『障害者権利条約』なのだと思います。この条約は世界の人たちの権利が保障されるための約束事です。いろいろなところへ、人たちへ、訴えていかなくてはなりません」

また、障害のある本人であり、本人活動家であるミア・ファラーさん（レバノン）などからもあいさつがありました。

「障害者権利条約について、より多くの人たち、その家族と一緒に考え、伝えあい、わかりあう世界会議にしていきたいと思っています。それらは私たちの心の声なのです。世界を変えていきたいと思っています。生きていくうえで、権利がどれだけ重要なのかを私たちは発表することができます。ですが、それよりも、ぜひ皆さん一緒に考え、話し合ってほしいのです。ぜひお願いします。多くの人たちと出会い、お互いの国のことを分かりあいましょう」

＜　自分たちの国の旗をふろう！　＞

今回のドイツ・ベルリン大会は74の国の人たちが参加してます。そして、参加者全員に自分の国の旗がくばられ、それぞれ参加者が旗をふりました。「日本のみなさん！　旗を振ってください！！　日本の方々は遠かったですね。さあ、旗をふりましょう！」みなさん、日の丸の旗をふりましたか？

＜　ドイツ首相からのビデオメッセージ　＞

ドイツの首相であるアンゲラ・メルケルさんからビデオメッセージが上映されました。

「障害のある人の権利が守られ、自分らしく生きていくことが重要です。また、そのためには障害者権利条約がとても重要なのです。そして、障害のある本人、家族が立ち上がらなけ

ればなりません。それは障害のある人だけでなく、障害のない人にとっても重要なのです。わたしが本気でそう考えているからこそ、私はこうしてみなさんにメッセージをおくっています」

幼いころ、首相の自宅近くに知的障害者の施設があったそうです。つまり、彼女は知的障害のある人とともに育ってきました。だからこそ、障害者権利条約の大切さがわかっているのです。

そのほかにもさまざまな人たちから「障害者権利条約」を中心に、スピーチがありました。現在、障害者権利条約が世界中で注目されているのがよくわかります。また、「貧困」というテーマもより強く打ちだされていました。そして、「障害者と貧困はどうやら深い関係がありそうだ」ということがわかってきました。これは世界共通の問題のようです。

日本ではどうなのでしょうか？？　ぜひ興味をもってみてください。

午後は分科会・ワークショップが各会場に分かれて開かれました。

ここでは、日本語の通訳が聞くことのできる分科会・ワークショップを紹介します。

○分科会

２．１

「どのような権利があるのか、なぜ条約が必要なのか」

14：00～15：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　ニューヨーク

２．２

「自分たちが住んでいる町や村レベルで、

また国レベルでどのようなことをする必要があるのか」

14：00～15：30

アクセシブルレベル　AA

部屋名　東京

参加者の質問に発表者が答える場面がたくさん見られました

○ワークショップ

２.Ｐ１　「条約について（２．１　分科会の続き）」

16：00～17：30

アクセシブルレベル　AAA

２.Ｐ１　「地域でどのように暮らしたいか」

16：00～17：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　ニューヨーク

コラム　「折り鶴」が大人気!?

日本のブースで誰かが折りはじめた「折り鶴」。しかし、これがブースを通り過ぎる海外の人たちの目にとまり、いつの間にかブースに人だかりが！！

「折り鶴」は手先が器用な日本人ならではの特技ですね。ブースを通りがかったら、みなさんもぜひ一羽折ってみてください。

ベルリン大会・速報③

2010年6月18日

○全体会2・開会式

「家族と本人が一緒に活動して、障害者の権利条約を実現しよう」

10：00～12：30

アクセシブルレベル　AA

通訳　あり

＜　親の意識が変わることの大切さ・レバノン　＞

障害のある本人は自分自身がエンパワーメントすることを望んでいます。しかし、その気持ちや感情のまわりには、親や支援者の「思い込み」「不安」「心配」という壁があります。

親は自分だけでなく、周囲の人たちとともに障害のある子どもを育てていくことが重要です。それを行動にうつすために、周りの人たちは、親の孤独を理解することが重要です。支援者も、親も、意識を変えることが重要なのです。

不安や心配にふたをするのではなく、それらに向き合うための支援を充実させていくのが大切です。子どもを施設へ閉じ込めることをしてはなりません。

決定は誰がくだすのでしょうか。親？　国？　制度？　まわりの人たち？

親は自分で決めることを望みます。しかし、子どもはそれを拒否しています。本人活動をしているような人たちはとくに“自分のことは自分で決める”ことを望みます。障害のある人から「親の意識を変えてほしい」と訴えられることもしばしばです。だから、私たちは親に対して、子どもの声に耳を傾けてくださいと訴えます。

＜　障害のある人、その家族に必要なこととは？・アルゼンチン　＞

障害のある人がどうやったら自立した生活を送ることができるのでしょうか。親が未来をどのようにつくりだしていくのが望ましいのでしょうか。やはり、未来がよりよいものになると思って歩んでいかなければなりません。不安や心配をするとそれが現実になってしまうことを学ばなければなりません。そして、障害のある人の声をしっかりと聞きましょう。どういった未来を歩んでいきたいのかに耳を傾けましょう。

日本のブースにはこうしてたくさんの人が訪れています

また、障害のある人にはさまざまな視点からの支援が、理解が必要です。法律的に、教育的に、医療的に、生活（地域）的に、すべての障害のある人が尊重されるこ

とが、よい社会をつくりだすために大切なパズルのピースです。

家族は子どもをサポートすることをがんばってきました。それらを助けるための「障害者権利条約」でなければなりません。これは政府や自治体だけの問題ではなく、一般生活のレベルにおいて、「障害者権利条約」で表現されている内容が実現できているのかを調査することも必要でしょう。

障害のある人の気持ちは、支援者や親からの強制によってつくられるべきではありません。常に中心にあるのは、障害のある本人のニーズであることを心の底から理解しましょう。

「障害者権利条約」の内容が実現できるように、多くの国でさまざまなことがチャレンジされています。障害のある人にとっての「権利」とはなにか。障害のある人が社会に前向きなことを発信できることを信じ、協力し合わないとなりません。これは地域レベル、国レベル、世界レベルで実現することが必要です。

午後は分科会・ワークショップが各会場に分かれて開かれました。

ここでは、日本語の通訳が聞くことのできる分科会・ワークショップを紹介します。

○分科会

3．1

「本人活動のエンパワーメント
自分で声を出す力を得よう」

11：00〜12：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　ニューヨーク

3．2

「家族のエンパワーメント」

11：00〜12：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　東京

○ワークショップ

3.P1　「本人活動のエンパワーメントについて
（分科会3．1の続き）」

14：30〜15：30

アクセシブルレベル　AA

部屋名　ニューヨーク

3.P3　「将来の生活は？」

14：30〜15：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　東京

コラム

スピーカーズコーナーに富田さん、ワークショップに袖山さんが登場！

14時からスピーカーズコーナー（ロンドン）で、富田さんの発表は始まりました。自分の生い立ち、家族との葛藤、病気のことなど、通訳をまじえて話してくれました。

「こういう発表をした経験はありませんが、緊張はあまりしませんでした。自分の意識が海外の人に伝わるかな、と思いましたが、伝わったのがわかったのでよかったです」と話す富田さん。カナダのピープルファーストの人たちがおおく訪れ、富田さんへ熱心に質問していました。

続いて、14時半からのワークショップ「将来の生活は？」のシンポジストとして、袖山さんが発表しました。

地域の人の出会いによって協力を得ながらの子育て、親の会の活動をはじめとした人との出会い、サポートブックをきっかけにした地域コミュニティの広がりなど、よりよい未来をつくっていくには出会いが大切だということを話してくれました。

ベルリン大会・速報④

2010年６月19・20日

○全体会４

「家族と本人が一緒に活動して、障害者の権利条約を実現しよう」

９：00～10：30

アクセシブルレベル　AA

部屋名　ニューヨーク

通訳　あり

＜　むかしに戻ってはならない　＞

障害、差別、貧困など、複雑にからみあった社会問題において必要なことは「いい変化をくりかえしていく」ことです。社会的、政治的、政策的、倫理的、精神性もふくめて、すべてのレベルにおいて戦うことです。あらゆる人の希望が反映されるような社会でなくてはなりません。それを多様性のある社会と言ってもいいでしょう。

インクルージョンという言葉を使っているだけでは意味がありません。自分自身を教育し、お互いに手を結び、行動にうつすことによって、私たちが目指しているビジョンが達成できるのです。

昔に戻ってはなりません。最初の波をチャンスだと思って乗りこえましょう。津波は１回目より２回目の波の方が困難なのです。破壊力を持って私たちに襲いかかってきます。

＜　困難と戦っていくために　＞

障害者権利条約はこれまでになかったまったく新しいアプローチです。EU（ヨーロッパ共同体）のすべての国はこの条約の実現に向けて、準備を進めているところです。そして、障害者権利条約は社会全体の価値観を変える可能性をもっていることを、EUに加盟してる国々は感じています。

世界が狭くなっている（グローバリゼーション）ことによって、私たちはお互いを知り、学びあう機会に恵まれています。たとえば、ヨーロッパからもっとも遠い国・日本が高齢化という非常にむずかしい問題を抱えていることを、私たちは知ることができます。

「雇用」については、障害のある人が働きやすい環境を整えること、働くことが重要なのではなく、働き続けることに支援を整えること、職場のなかで合理的配慮が徹底される必要もあるでしょう。

「教育」の現場において、障害のある人は取り残されています。たとえば、障害のある人は大学や専門学校（高等教育）などの場で学ぶことができません。また、教育を受けること、それが雇用に結びつかないのはなぜなのでしょうか。しっかり分析し、戦略を立てなければなりません。

そして、「貧困」です。一定の生活水準を保つための収入が必要です。EUにおいては、共通のプログラムを通じて、貧困を解決していくことが望ましいと考えます。技術的、精神的にEUとほかの国々がもっと交流する必要があると思います。

＜　ほほえみを武器に　＞

問題は山積みです。それらを解決するスピードをさらに速めていく必要があります。そのためには、ネガティブなことに向き合う強い気持ちが必要なのです。バラバラではなく、「豊かと言われている国」「豊かでないと言われている国」が平和的なつながりをもちながら変化していく必要があると思います。

この分科会では「貧困と戦う」という表現がたくさん使われました。そこでみなさん、「ほほえみ」という武器をもってください。そうすることで、この戦いに勝利することができます。みなさん、それができますか？　ぜひ、普段の生活のなかで、ここにいる皆さんの「ほほえみ」が絶えないことを願っています。

全体会５
完全な市民権に向けて

14：00〜15：30

アクセシブルレベル　AAA

部屋名　ニューヨーク

通訳　あり

分科会に登場した長瀬さん（中央）と松井さん（左）

＜　大きな変化が世界中で起こりつつある　＞

世界中で「障害」が医療モデルから社会モデルへと変化しています。ゆっくりかと思うと、急に速くなったり、真っすぐ進むことはほとんどなく、くねくねと曲がりながら、でも前へ進んでいます。

社会を変えていかなければなりません。本人活動家はそういった意味では、天才的な革命家（社会を変える人間）である可能性があります。彼らはあらゆる空間、場所からアイデアは得ることができます。

重い障害がある人が何を考えているのか。このすべてを理解することはむずかしいと思われがちです。しかし、彼らの感情・気持ちをキャッチすることは、なにも天才的な才能や技術を必要とするわけではありません。たしかな時間と、相手の気持ちを知りたいという純粋な思いがあれば、それは可能なのです。

＜　医療の問題をどう解決するか　＞

どうして障害のある人に対する医療サービスの質は低いのでしょうか。医者が障害のある人の表現を受け取るスキルがないのです。医者は彼らの「障害」にだけ目を向けて、彼らの感じている痛みに目を向けようとしません。だから、致命的な間違いが起こるのです。

あるとき、医療サポートをするワーカーはこう言いました。「彼は痛がってはいません。私は専門家なので、お母さんより彼のことがわかるのです」と。こういった間違いから「構造的差別」がつくりだされます。この差別は国レベル、世界レベルで同じ構造であり、そのな

ワークショップで発言する館森さん

4．会議報告：1）現地における大会速報

かで多くの人が苦しんでいることを知る必要があるでしょう。

午後は分科会・ワークショップが各会場に分かれて開かれました。
ここでは、日本語の通訳が聞くことのできる分科会・ワークショップを紹介します。

○分科会

4.1
「貧しさと戦うために、どのように協力するか」
11：00〜12：30
アクセシブルレベル　AA
部屋名　ニューヨーク

4.2
「地域で自立して暮らすために」
11：00〜12：30
アクセシブルレベル　AAA
部屋名　東京

○ワークショップ

5.P1「障害者の権利条約が、どのように私たちを助けてくれるか（全体会５の続き）」
16：00〜17：30
アクセシブルレベル　AAA
部屋名　ニューヨーク

5.P2 「インクルージョンのための地域作り」
16：00〜17：30
アクセシブルレベル　AAA
部屋名　東京

ドイツ・ベルリン大会が閉会しました。みなさん、ほんとうにお疲れさまでした。
閉会式でダイアン・リッチラーさんが「この大会で一番感動したのは、地震でたいへんな状況にあるパナマの方の発表がおわったあと、ある車いすの男性が５ユーロ差しだし『このお金をパナマのために使ってください』という言葉とその行動です。今回のような世界中の人が集まる大会の意味を感じたのです」と話していました。

みなさんも大会のさまざまな場所、人との出会いのなかで、“この意味”を感じとったのではないでしょうか。

３枚のカード（アクセシブルカード）

ドイツ・ベルリン大会では、前回のメキシコ・アカプルコ大会と同じように、３枚のカード（アクセシブルカード）が使われました。カードは３枚あり、それぞれ「緑」「黄」「赤」の３色があります。

ドイツ・ベルリン大会でこれらのカードが使われたことをきっかけに、日本でも「障がい者制度改革推進会議」「総合福祉部会」などでこのカードが使われることになりました。今後、知的障害のある本人を交えた話し合いの場で、このカードが使われることが求められています。

＜カードの意味＞

緑　意見に賛成・同意します
黄　難しい言葉や表現があってわかりにくい、
赤　非常に難しい、話すのをストップしてほしい

緑

黄

赤

6月16日　分科会2．3．条約は豊かな国にも貧しい国にも必要です
6月18日　ワークショップ5．P6．中等教育と生涯教育の事例
6月19日　分科会6．2．世界の国際機関との協力についての討論

アジア太平洋の経済危機、東京大学とインクルージョン、国際的なパートナー

国際育成会連盟理事・全日本手をつなぐ育成会国際活動委員長
長瀬　修

◆アジア太平洋の経済危機

6月16日：分科会　条約は豊かな国にも貧しい国にも必要です

アジア太平洋地域での2008（平成20）年9月以降の経済危機の影響が、障害をふくむ社会保障にどのように影響を与えてきているのかを紹介しました。当初、報告者を派遣する予定だった国連のアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）の17カ国を対象とする調査に基づいて報告を行いました。

多くの国は、⑴緊急的措置の導入、⑵社会保障制度の拡充、という二つの形で対応していることが明らかになりました。短期的な緊急的措置には、一時的な手当ての支給、住宅対策、職業訓練などが含まれています。もっと長期的な影響をもつ、社会保障制度の拡充には、年金制度の導入や貧困層の所得保障、失業保険制度・保険制度の導入があります。

生活保護制度や、年金制度のない途上国が多いアジア太平洋地域の課題は非常に大きいのが実態です。その中でも特に弱い立場に置かれているのが障害のある人です。

◆東京大学とインクルージョン

6月18日：中等教育と生涯教育の事例

東京大学が知的障害のある人たちとどのように協力しているのかを紹介しました。

一つは、知的障害のある人を講義のゲストスピーカーとして招待することです。これは、私が担当している教養学部の全学自由研究ゼミナール「障害学入門」や経済学部での「障害学Ⅱ」で行っているものです。話していただく内容は、知的障害のある人の本人活動や、国際協力機構（JICA）の専門家やボランティアとして海外に派遣されたときの活動内容です。知的障害のある人の子育てに関する漫画『だいすき！！』の

著者・愛本みずほさんをお招きした時にも、知的障害のある人に参加してもらい、『だいすき！！』の感想を伝えてもらいました。

ほかには、全日本手をつなぐ育成会が2009（平成21）年３月に刊行した『わかりやすい障害者の権利条約』の作成への協力です。

東京大学は当初、編集を担当した作業チームのメンバーに謝金を支払ったほか、会議室を作業の会場として提供しました。また、作成後、学習会にも会場を提供しました。

また、2005（平成17）年11月から開始された知的障害のある人の雇用についても、紹介しました。2006（平成18）年４月からの集団雇用である施設部環境整備チームは当初、知的障害のある人10名で発足し、現在は13名の体制です。経済学部の障害学の講義の一環である清掃実習の日には、知的障害のある職員がジョブコーチとして、学生の指導に当たっています。

◆国際的なパートナー：アジア太平洋経済社会委員会との協力

６月１９日：分科会　世界の国際機関との協力についての討論

アジア太平洋地域では、1993（平成５）年から国連のアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）による「アジア太平洋障害者の10年」を開始し、2003（平成15）年からは第２次の地域の10年を進めています。

国際育成会連盟と全日本手をつなぐ育成会が協力をしているタイのアジア太平洋障害者センター（ＡＰＣＤ）は、このアジア太平洋障害者の10年の実施機関として指定されています。第２次の地域の10年の行動計画である「びわこミレニアムフレームワーク」には、重点事項として、障害のある人とその家族の自助組織の育成が示されています。2009（平成21）年３月のタイでの「ダオルアン」、2010年３月のミャンマー（ビルマ）での「ユニティ」という二つの国での初めての本人活動グループの誕生も、このアジア太平洋障害者の10年の活動に位置づけられます。

現在、2012（平成24）年に終了する第２次の地域の10年の「次の10年」をどうするのかの議論がすでに行われていますが、知的障害のある人の本人活動推進と家族支援をより明確に位置づけていくことが重要です。

なお、当初、国連事務局の方が報告予定でしたが、当日、その方が都合により欠席のため、司会者であるダイアン・リッチラー会長から急遽、依頼があったために、異例ですが、３回目の報告を行うことになりました。

大会での報告のようす

6月17日　ワークショップ3．P3．　将来の生活は？

息子・娘が今から20年後には どのように暮らし、働いているか

全日本手をつなぐ育成会
袖山　啓子

◆これまでの生活を振り返って

子どもが生まれてきて、まず告知があり、保健所や医療センターからの働きかけを受けて、地域で同じ障害のある子どもの親同士で会を立ち上げました。そして、医療機関を通しての訓練や療育を受ける段階へと進んでいきました。

子どもが1才になり、職場復帰のために保育園を探しました。当時、障害児の受け入れは指定保育園制をとっており、最初は無認可の保育園にお願いしました。4歳になり、ようやく指定保育園に入れたあとは、よい環境に恵まれました。また、平行して地元にある訓練会の紹介を受け、この教室にも通い、心理リハビリテーションの会にも所属し、

家庭でもできる方法を学びました。

次に指定保育園での統合保育のようすについて写真を使って紹介しました。この保育園では運動会の演技の内容について子どもたちが話し合って決めることになっていました。息子は当時リボンやひもが大好きだったので、バトンの先にリボンをつけた新体操のようなダンスを考えてくれて、ともに演技しました。また、話したり歌ったりできない息子ですが、クリスマス会でもクラスのみんなと一緒に手をつないで、参加しました。

小学校1年最初の2カ月は日本の特別支援学校で、その後の2年間はアメリカの特別支援学校で、小学校3年生から中学校卒業までは日本の特別支援学級で、そして高校は特別支援学校高等部へ通いました。

日本で通った特別支援学級は、小学校・中学校ともに、生活交流を基本とする学校であったため、朝と帰りのホームルームとお昼ご飯、ロングホームルーム、総合の時間などや、行事も交流級で過ごしました。インクルーシブ教育というとき、日本では正

確な定義がありませんが、知的に重度であり、また中学生となり行動障害が激しくなってきた息子の状況を考えると、最大限制限の少ない環境での教育でした。

◆現在の生活

現在通っている作業所の写真で、近隣の自治会の人の協力を得て、ダンボールや新聞紙を収集し、リサイクルするという仕事をしているところを報告しました。

次に週間スケジュールを、作業所、自宅、ショートステイなどの過ごす場所と、職員、親などの支援をする人などで、色分けした表を提示しました。

また、月間スケジュールとして、毎週通っている体操教室、週末には外出などを楽しんでいることをお伝えしました。

特に楽しみにしているのが、学生ボランティアとの外出や体操教室です。高等部在学中には登校拒否になってしまいましたが、この活動には、何とか出かけることができていました。本人はもちろんですが、親も助けられた活動であり、つながりでもありました。

◆これからにむけて

下記の表を使って、最低限何を考える必要があるかを見ました。

現在は通所の送迎、契約など多くの場面で、家族の支援が基本となっています。しかし、将来はどうなるでしょうか。この表の空欄を埋めるのは、本来息子本人です。実際には息子がすべてを埋められなくても、なるべく埋められるように、親として、親の会として何ができるのかを、次に述べます。

◆将来に向けての準備

(1) 個別の準備

全日本手をつなぐ育成会の、各地域での取り組みの一つである「支援手帳」について説明しました。この手帳は書き込み式になっていて、個人のプロフィール、福祉制度などの利用情報、ライフステージごとの情報、そのほか知的障害のある人が、地域で安心して暮らすことを目指したときに、必要となる情報を記録するようになっています。

(2) 社会システム

最初は学校に行くことができない子どもたちを、何とか学校へ行かせたいという思いか

表

	現在の状況	現在は誰と	将来は？	誰と？
仕事	作業所	職員・家族（送迎）		
収入	障害年金＋家族の支援			
意思決定	支援を受けて	家族の支援		
住居	家族の家	家族		パートナー？
余暇	いろいろ	家族・ボランティア・ヘルパー		友達？

ら始まったといわれる全日本手をつなぐ育成会です。こうした運動の成果として、養護学校義務化、通勤寮の予算化、小規模作業所、雇用促進、グループホーム、運賃割引などさまざまな制度ができてきました。

⑶　インフォーマルで自然な支援

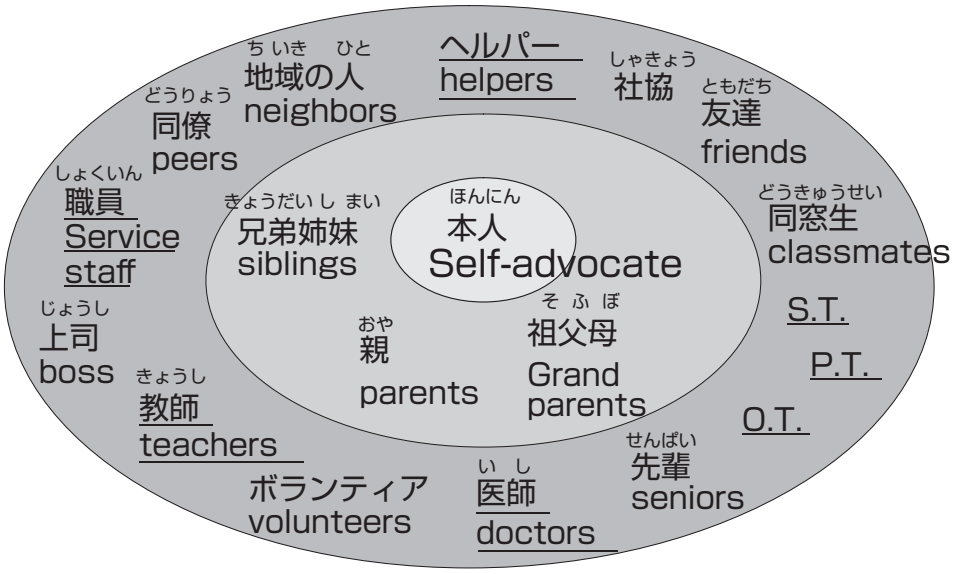
最後に、この大会でも何度も耳にする地域生活です。地域に暮らすということは、ただ単に物理的に住居が地域にあるということだけでなく、地域に人間関係のつながりがあるということです。私たちの子どもの多くが、次の図にある下線のある人たち、すなわち仕事でつながっている人たちとは密接につながっていても、同僚・地域の人・友達・同窓生・先輩・ボランティアなどの人たちとのつながりがどれくらいあるのか、それが問われていると思います。

さらに、地元でやっている親の会の連携のネットワークについて、例を紹介しました。民生委員、体育指導員、青少年指導員、大学のボランティアサークル、社会福祉協議会、地域ケアプラザ、特別支援学校などとの連携があります。また、親の会同士としては、市レベルでは知的障害関係の親の会が、区レベルでは、障害種別を越えた親の会が連携し、当該福祉局や教育委員会などとの交渉などを行っています。

こうした活動の成果の一つの例として、「災害時要支援者マニュアル」が作成されました。

全国各地の育成会で作成されている「支援手帳」

図　Human relationships
本人を取り巻く人間関係



また、地元で地域活動ホームを立ち上げるまでに行ったアンケートについても説明しました。

最後に中学校時代のクラスメートとの人間関係が垣間見える写真を紹介しました。インクルーシブ教育の成果として、こうした人間関係が継続していけば、みんなが望む地域生活が可能になるでしょう。

こうしてみると、親の会としてすでに、子どもたちの将来のために準備を始めていることはたくさんありますが、さらに私たちの子ども一人ひとりが支援を受けながら地域で生活できるように、すなわち子どもたち自身がどんな仕事をし、どのように暮らすかを、決めることができるようになるためのレシピ（開会式のダイアン・リッチラー氏の話より）を考えていくことが、必要です。

分科会が終わったあと、質問をうける袖山さん。

最後に、会場からはグループホームの規模や自立を目指す人にとって、どのような支援があるのか、またサポートブックについてなど、質問がありました。自立生活支援アシスタントについて簡単に説明し、サポートブックについては、セッション終了後にも実物を手にとってもらいながら、情報交換を行いました。

大会の会議に参加しやすくするための工夫

○大会プログラムは、二通り用意されていました。
「一般用プログラム」「わかりやすいプログラム」

○大会プログラムの中では、会議のわかりやすさを明記しました。

AAA	一番わかりやすい会議 わかりやすい言葉が使われます 絵や図を使った表現などの工夫があります
AA	中くらいのわかりやすさの会議
A	あまりわかりやすくない会議 専門用語が使われます

○会議室の標記にも工夫がありました。
会議室に世界の主要な都市の名前をつけました。
また、その都市のシンボルも合わせて標記し、目で見てわかるようにしました。

部屋名 New York

部屋名 Tokyo

部屋名 Sydney

部屋名 Rio

部屋名 Berlin

部屋名 London

6月17日　スピーカーズコーナー

ベルリン大会
スピーカーズコーナーで発表して

社会福祉法人麦の子会・就労支援事業所ジャンプレッツ
冨田　勉

今回スピーカーズコーナーで発表することになったいきさつは、実は、むぎのこ会の北川園長がこうえんをしたことがきっかけで、それにもとづいて、まずは2008年11月頃に、むぎのこ発達クリニックで、障害の子どもをもつお母さんたちにこうえんをしたことをきっかけにジャンプレッツの中で、ドイツベルリン大会を聞いて、父母がげんきなうちに少しでも、多くの人々に私のけいけんを話したいと思い、もうしこみしたしだいです。

私をいれて、6人がジャンプレッツから行き、スタッフは高田施設長と、岩田看護師さん。メンバーは、私と、阿部さんと、杉本さんと、三塚さんで6月13日にＪＲ札幌駅にしゅうごうしました。私の薬も、約200じょう以上トランクに入れました。

スピーカーズコーナーで発表する冨田さん。

カナダのピープルファーストのメンバーが多く、聞きに来ていました。

ドイツ大会1日目のプレ会議の中で、グループ討議がおこなわれ、この大会に来た私の目的はスピーカーズコーナーで発表することです、と話しました。当日、スピーカーズコーナーではイスを「コ」の字のようにならべて、私がその前に立ち発表しました。プレ会議に出ていたカナダの人が多く出席してくださって、80％ぐらいがカナダの人でした。無事に終わりました。

そのかんそう、いけんは、クリニックの講演でのそぼくなしつもんではなく、本人がこんごどのように生きていき、やっていくのかという内容のしつもんがでました。

世界大会は初めてで、外国も初めてでした。私のことばが、世界に行くことは初めてのことです。私としてはよいけいけんになりました。

冨田さんとベルリン大会スピーカーズコーナー

社会福祉法人麦の子会
統括部長　古家　好恵

冨田さんはジャンプレッツに通所して7年目。昨年からは就労移行支援事業の調理部門で、調理の仕事をしています。初めて参加するベルリン大会のスピーカーズコーナーにて、自分のこれまでのストーリーを話されました。

冨田さんは未熟児で生まれ、脳にダメージを受け、言葉の教室に通っていました。また、小学校では鏡字でした。小・中学校でいじめにあったこともあったそうです。高校へ進み、経理が得意で「簿記3級」「計算事務3級」「そろばん6級」「電卓初段」を取得、そのほかにも運転免許をとりました。また、子どものころからスイミングで、得意でさまざまな大会で活躍しました。

高校卒業後、一般就労してつらい経験により入院することになりました。その後は作業所へ通いはじめますが、作業所のスタッフから冨田さんのお父さんに「冨田さんは、手振れがあり、作業は難しく、練習してもなおるものではありません。一般就労を目指すのではなく、福祉就労でやっていくことが大切です」と話され、何度も同じようなことをくり返しながら、お父さんの考えが変わっていったそうです。そして、「通所更生施設ジャンプレッツ」が開設したときに、冨田さんは自分自身で福祉担当者に相談して通所することに決めたそうです。

てんかん、高血圧、糖尿病、自律神経失調症が自分自身には弱点があり、とくに性格とてんかんのために、バランスが悪くなると同じことを何度もくり返えさないと気がすまなくなり、自分では解っていてもなかなか直らないことなども発表されました。

スピーカーズコーナーではカナダのピープルファーストの人たちが熱心に冨田さんの話を聞いてくださり、「冨田さんが話したストーリーは一般の人にも障害のある人にも話したらいいと思う。冨田さんのことを広く知ってもらうことが大切」と感想を述べてくださいました。そして、今後冨田さんが自立して、障害者のための運動をすすめることの大切さについて、意見がありました。今後の生活の広がりに期待がもてます。

（通訳はジャンプレッツ保護者の泉さんがつとめてくださいました）

6月18日　分科会4．3．貧しさと社会的エクスルージョンなくすために、どのようにお金を使うか

福祉と経済のかけ橋に

東京大学経済学研究科・経済学部　教授
松井　彰彦

◆障害者の世界大会に経済学の発表？

ベルリンで開催された世界大会に参加し、一経済学者として講演してきました。「なぜ経済学者が？」と不思議に思う人も多いのではないでしょうか。実際、これまで福祉と経済は水と油のように扱われてきました。それに対し、福祉と経済の間の溝を埋め、障害と経済という学問分野を作るべく、数年前に一つのプロジェクト「障害と経済に関する研究（READ*）」が始まりました。この日本から発する世界初めての試みを大会でとりあげてもらったのです。

◆経済学という視点を上手に使うと

経済学が大切だと考える費用対効果（マイナスとプラスの差し引き）の視点は福祉の世界では評判がよくありません。会長講演では、昔の数学の教科書に、障害者に使っている費用をほかの有益な投資に回したらどのくらいの効果があるか、という問題が載っていた話もされ、費用対効果の視点が批判されていました。

評判のよくない「費用対効果」ですが、うまく使うと、こんな話もできます。一人の車椅子ユーザーの社会参加のためにスロープをつけてほしいと言っても、役所はなかなかつけてくれません。しかし、100人のためにスロープが必要だと言えば、役所も動きます。たった一回の支出で100人の人がその恩恵を受けられるからです。

知的障害者とひとまとめにして呼ばれる人々も10人雇えば、自然とリーダーが現れ、眼の輝きが変わり、仕事もはかどります。彼らが働くことで、本当に働けない人にもお金が回るようになります。

もっとも、私たちは「働けない人」という決めつけにも挑戦していかなくてはいけません。東京大学でも昨年の夏、家で働く「在宅就労」という制度を導入し、3名のコンピュータ技術者が働きはじめました。仕事場はそれぞれの自宅です。能力が高いうえ、費用対効果も高いです。オフィススペースも節約できますし、仕事をしているかどうかの確認も、今や電子メールやウェブ電話な

どを使えば、ほぼ無料でできます。

しかし、現代の経済学の本当の力は費用対効果の分析にあるのではありません。人と人の関係を分析するゲーム理論という道具を手にした経済学は、市場と人との関係や費用対効果の視点を離れて、自在に人間社会を分析できるようになりました。

たとえば、「自立」という言葉も、現代の経済学からすれば、「自分のことは自分で決める」という経済学の基本的な考え方以外のことは、程度問題でしかありません。電車に乗れない人も、「在宅就労」ならば自立できます。それに、考えてみれば、ひとりで職場に行ける人は決して多くありません。電車に乗っても運転手がいなければ動きません。お金をたくさん稼ぐ人でも、お金を何かと交換できなければ、生きていくことはできません。みんな、お互いに支え合って自立しているのです。

◆経済学と障害者権利条約

「自分のことは自分で決める」という経済学の基本は、「私たち抜きに私たちのことを決めないで」という国連の障害者権利条約の考え方とも似ています。障害者は福祉の対象ではなく、自分で物事を決めていく主体です。READでも、10名を超える障害のある人が、中心メンバーとして研究や情報発信に携わっています。

経済政策というと、つい財政・金融といった国全体の大きな政策にばかり目が向いてしまいますが、あまり経済がよくならない中では、600万人を超える障害者、障害者制度と医療制度の隙間で困っている長い間病気の人、育児のために仕事を辞めざるを得ない母親、増え続けるお年寄りなど、社会に埋もれている人々を有効利用するための個々人を見つめた施策にこそ、もっと目を向けるべきでしょう。私たちは、人を活かすための投資という視点、そして自立のための支え合いという二つの視点を採りいれながら、少しでも多くの人を社会の中に包み込んでいかなくてはならないのです。

私の発表の後、ドイツのビーレフェルドという街から来たおばあさんが、コメントをくださり、自立のための支え合いという考え方に賛成してくれました。障害者と健常者が一緒に暮らす中で、障害者だけではなく、健常者も元気になったというのです。私がいつも行く経済学の学会とは話す相手が違うので、とても緊張しましたが、そのおばあさんのコメントを聞いて、ようやくほっとしました。育成会の方々にもごあいさつができて、とても充実した時間が過ごせました。ありがとうございました。

*READ : Research on Economy And Disability

ドイツ・ベルリン大会・開会式
すべての人にインクルージョンを
「国連の障害者権利条約」

(社)日本発達障害福祉連盟
早稲田大学教育学部 客員教授
湯汲 英史

青い空が広がるベルリンで、第15回国際育成会世界会議が開かれました。

◆さらに広がる本人参加と主張できる場

ハーグ（オランダ）、メルボルン（オーストラリア）、アカプルコ（メキシコ）に続き、筆者がこの世界会議に参加するのは4回目です。ハーグ大会では、本人はまるでパーティの花のようでした。ほとんどの人は話さず、黙っていました。

メルボルン大会では、開会式の壇上に本人たちが並んでいました。彼らは、施設や病院での暮らしの問題を訴えました。アカプルコ大会では、本人ばかりでなく、兄弟姉妹も語りました。そしてベルリン大会では、ミア・ファラーさん（レバノン）ら3名の本人が、障害者権利条約への期待を語りました。また、「自分たちのことは、自分たち抜きで決めないで」と主張しました。世界中の本人の願いは、地域での暮らしであるとも話しました。

開会式のようす。

◆ドイツで開かれた意味

ドイツでは、ナチス時代に数十万人の知的障害のある人が殺されました。70年前のことです。殺された彼らには、何の罪もありませんでした。知的障害があるいうだけで殺されたのです。12年前のハーグ大会では、ドイツの過去が強く非難されました。

開会式では、主催者よりこれらの過去が語られました。ドイツで世界大会が開かれた意味ですが、ナチス時代の障害者虐殺を、二度とくり返してはいけないことを確認する意

味があります。

◆注目される障害者権利条約

開会式をはじめ、今回の主な話題は国連の障害者権利条約でした。ハーグ、メルボルンの二つの大会では、本人の意思尊重、自己決定がメインの話題でした。アカプルコ大会では権利条約の意味が報告されました。ベルリン大会では、権利条約によってすべての人が同じに扱われる権利をもつと紹介されました。その権利ですが、障害があるとかないとかは、まったく関係ありません。開会式では、国連事務総長の世界会議へのメッセージが紹介されました。そのなかで、権利条約の役割が力強く語られています。権利条約をもとに、各国の法律も含め、社会の仕組みを変えるべきことが明らかです。

◆多様性を認め、尊重する社会

障害とはさまざまな肌の色、違う言葉を使う人たちがいるのと同じです。一人ひとりは違っていて当り前です。もちろん、誰もが一人では生きられません。障害のある本人には、社会からの特別な支援が必要です。

社会は、人はさまざまであること、その多様性を認めなくてはいけません。これこそが、大会で示された重要な考え方です。

◆世界は同時に進んでいる

ある分科会で、30数年前のドイツの作業所の話が出ました。そして、発展した現在の姿が紹介されました。それは、日本と同じ道のりでもありました。権利条約への関心もそうですが、世界は同時に進んでいます。

同時に進む世界だから、歩むべき方向を知ることが大切です。ベルリン大会には、74の国から約2500名が集まり、学び、話し合いをしました。参加者は、学んだことをそれぞれの国に持ち帰ります。それが、世界中の本人や家族の幸せの実現につながるはずです。

パン・ギムン国連事務総長からのメッセージ

今回の大会はインクルージョン・ヨーロッパ、ドイツ育成会が主催し、世界70カ国以上からの参加者が国連障害者の権利条約という目標に向かってさらなる行動を起こす場となっています。

現在、権利条約は145カ国が署名、87カ国が批准しています。これがユニバーサル・スタンダードとなり、市民社会、政府、団体などが継続的に関わることが不可欠です。障害のある人がエンパワーされると、障害の有無に関わらず、すべての人にとって住みやすい社会になるのです。

インクルーシブな社会が、社会の進歩と発展のために不可欠であることをテーマとする国際育成会連盟の50周年を記念して、改めて世界の仲間とともに権利を現実のものにするということに対して、われわれが関わっていくことを表明します。国連のこの目標に向けての、国際育成会連盟の貢献に感謝するとともに、大会の成功を祈念します。　翻訳：袖山啓子

プレ会議・本人のための準備会
ー大会そのものが「共生の場である」ことをめざしてー

全日本手をつなぐ育成会本人活動推進委員会
花崎　三千子

大会事務局の発表によると、ベルリン大会に参加した2700人のうち850人が知的障害当事者でした。「権利条約を現実のものに」のスローガンのもとに開かれたこの大会が、障害当事者にとって有意義であり、十分に参加できたと実感できる場にすることは、大会実行委員会に課せられた大きなテーマです。そのためにこの大会にはいくつかの工夫と仕掛けがありました。

その第一は、すべての全体会と分科会を難易度（むずかしい会議か、わかりやすい会議か）によって「AAA」「AA」「A」の３段階に分け、それをプログラムに書きました。参加者が、自分に合った会議を選ぶことができるためです。第二は「アクセシブルキット」の活用です。参加者に赤、黄、緑のカードが配られました。参加者はこのカードを掲げることで「ストップ！　あなたの話し方は難しくてわからない（赤）」「もう少しゆっくり話して（黄）」「よくわかる、その調子でつづけて（緑）」というように報告者に伝え、話し方を変えてもらうことができます。これはスピーカーに対する聞き手からの支援です。このどちらも、前回のメキシコ大会からすでに行われており、特に新しいことではありませんが、わからないことが一方的に聞き手の力不足のせいにされるのではなく、わかるようにすることこそが大切なのだという新しい考え方に立った重要な実践です。

◆本人のための準備会

午前：大会を理解しよう

大会前日に本人のためのプレ会議（準備会）が、ドイツ語を使う国の人たちとその他の国の人たちの２つの会場に分かれて開か

準備会ではさまざまな国の人が混って議論がすすみました。

れました。ドイツ語会場には200人以上、その他の国の人々の会場にはカナダ、ニュージーランド、オーストラリア、日本を中心に50人ほどが参加しました。午前の会議はカナダのピープルファーストの人たちが進行役でした。

この会議の目的は、1.参加者がお互いに知り合うこと、2.大会の目的や流れを理解することの二つです。最初に小グループに分かれて自己紹介。「なぜこの大会に参加したのか」を一人ひとりが話しました。「同じ立場の他の国の人の話を聞きたい」「ここに来ることができたのは経済的に豊かな国の人たちだ。でも、障害のある人が生きにくい国が本当に豊かといえるのだろうか」など、するどい意見が出ました。次に全体で集まり、お互いに連絡を取りあい合い協力していくことが確認された後で、参加国の代表が短いスピーチをしました。

日本からは北海道の札幌から参加した三塚勇太さんが自分の生活について報告し、メキシコ大会で出会った仲間との再会を喜んでいると述べると、盛んな拍手がおくられました。続いて、大会のプログラムや会場の説明があり、話し合いの会議だけでなく、絵を描いたり彫刻ができるアート広場、ごちそうがたくさん用意されるパーティー、観光ツアーなどが紹介されると、「この大会で楽しいことをたくさんしよう！」とみんなの気合がいっそう上がりました。

小グループに分かれ議論。

◆本人のための準備会

午後：「戦略会議」

午後の準備会は「戦略会議」という位置づけです。デイビッド・コーナー(ニュージーランド)、ミア・ファラー（レバノン）など、この大会の準備委員をつとめた当事者が進行しました。最初は話し合いのルールの確認です。「むだな発言などない」「敬意をもって聞こう」「はっきり話そう」「情報を分けあおう」などが確認されました。次に「本人活動とはなにか」について話し合われました。「自分のために自分で発言する」「ほかの人をサポートする」「自分たちの声をどう伝えるかを考え助けあう」など多くの発言がありました。すべての発言を進行役の脇にいるサポーターがカラフルなマジックで紙にかき、それを分類して全体で確認するという、手法がとられていました。

最後にデイビッド・コーナーが「この会議は障害者権利条約について話すためのものである。大切なのは政策に訴えることだ。力を合わせよう！」とまとめを行い午後の会議を終わりました。

6月16日（水）ワークショップ2．P2．地域でどのように暮らしたいか

地域でどのように暮らしたいか？

NPO 法人 地域生活支援ネットワークサロン
波多野　耕

◆私の人生

（ペトロビッチさん：クロアチア）

私は小さいときに入所施設に入れられて人生の大部分を入所施設で暮らしてきました。そこでの暮らしはみじめで、私は多くの権利を奪われてきたのです。入所施設の外の友人はつくれず、就きたい仕事にも就くことができませんでした。学校にも行きたいと願いましたが施設の職員から「あなたの行くところではない」と言われ希望は叶いませんでした。

施設生活では多くの仕事をしてきましたが給料をもらったことは一度もありません。職員が付き添い、グループでしか外出はできませんでした。一人では外出も許されなかったのです。

私たちのことをひどいあだ名で呼び、しつけと称してひどい仕打ちも受けました。着ているパジャマを脱がされ、そのパジャマで何度もぶたれたこともあります。

恋人を作ることはもちろん、結婚すること も子どもを産み家族をもつことさえも許されませんでした。職員たちは、私たちの言葉にまったく耳を傾けてようとはしませんでした。こうした施設に私は25年間入所していたのです。

私が施設を出て地域で暮らし始めたときは、地域で自立するための「知識」や「方法」を学ぶ機会が入所施設ではまったくなかったので、一人では暮らせませんでした。しかし、そこでは多くの学ぶべきことがありました。支援者（アシスタント）が多くの支援をしてくれました。そのおかげで料理ができるようになり、一人でも外出ができるようになりました。彼女たちは友人でもありました。そして、インクルージョンの活動の仕事を見つけてくれました。

職場で一生懸命働いて生活することは、他の人と同じく大切なことです。職場では数多くの友人と知り合い、そして初めて給料をもらうことができました。

大きな希望も叶いました。学校に行くこと

ができたのです！　小学校課程を卒業して調理師学校に進みました。卒業後はホテルのレストランで助手としてフルタイムで働き始めました。

働き始め、コミュニティハウスから出ることも考えはじめました。地域支援組織の支援者がサービスの情報を提供してくれて計画を立てる手助けをしてくれました。2年前についに自立して一人暮らしをする夢が叶いました。

すべての入所施設が閉鎖され、他の人と同じようにすべての人が暮らせることを希望します。

◆社会で暮らすこととは？

ヒグマーさん・ドイツ

地域でどのように暮らしたいか？　権利条約の中では第9条において「すべての障がいを持つ人は、誰と暮らすか、どこで暮らすか、どのように暮らすかを自分で決められる」と謳っています。

この権利条約を批准した国の政府はこの条文の実現のために適切な介助者や支援を提供しなければなりません。

次にドイツでの地域生活の可能性＝選択肢について伝えます。家族と暮らす人もいます。8人から10人くらいのホームで暮らす人もいます。ホームでは一人部屋か場合によっては二人部屋で暮らしています。キッチンもあり居間もあります。

このホームとは別に4人から8人で暮らすホームもあります。アシスタントが常駐しているのでいつでも支援が受けられます。

このほかカップルで暮らすことや一人で暮らすこともできます。自分で自分の暮らしが決められるのです。自分で家の鍵を持ち、自分で決めて生活することができるのです。

私は掃除や洗濯などの家事支援を受けています。最近、支援を多く必要とする人のホームもできています。支援を多く必要とする人も地域で暮らせるようになってきたのです。余暇活動にも支援が受けられます。最も多くの支援を必要とする人は3人くらいで暮らしています。24時間の支援がついています。

アパートメントタイプで暮らしている人もいます。一人暮らしや家族と住んでいます。アパートメント（マンション）ではキッチンをはじめ生活に必要なものが自分の居住場所にそろっていますので、自分で調理することもできます。

アパートメントには、障がいを持たない人も暮らしています。社会の普通の暮らしなのです。アパートメントタイプにはみんなで集まれる場所があり、お茶をのんびりと飲んだり、余暇活動などの話し合いをすることができます。この場所は24時間オープンなのでアシスタントの支援を受けることができます。

私たちを支援する人は、家族、親戚、法的な後見人、公的アシスタント、看護や介護の資格を持つ人などがいます。病院に付き添

ってくれるアシスタントもいます。専門的な支援を行う人と日常的な支援を行う人がいるのです。

誰がその自己負担額を払うのかを話します。資産や給与のある人は自分で支払います。家族が支払ったり、公的年金の中から支払われている場合があります。

課題もあります。自己負担額を減らすためにサービス事業を減らし必要な支援が受けられないということです。

驚いたことに、国によっては自己負担ができないからといって入所施設に入れられてしまうこともあるようです。そういうことはあってはならないのです。すべての人、そしてすべての男性もすべての女性も自分で選んで暮らせるのです。

たとえば、本人が入所施設を希望したとしても、そこは適切な場所でなくてはなりません。私は入所施設を悪者にするつもりはありません。「入所施設から出たくない」と言う人もいます。ですから入所施設の中でも本人の生活を制限してはいけないし、本人の意思を尊重しなければいけません。

本人が言葉などでうまく表現できない場合は、本人が意思の表現をできるような適切で質の高い支援が必要になります。

私たちは諮問委員会をもっています。親や家族、施設の職員、政治家やマスコミと話し合い要求を主張します。

◆権利条約は守るための主張です

ドイツはこの権利条約を作るために積極的でありました。だからこそ、特にドイツでは権利条約が日常生活の中で実現しなければならないのです。

私たちは平等がほしいのです。どこに住むかという平等などです。また平等ではない状況は取り除かなければなりません。

生活は様々であり提供されるサービスも広がっていく必要があります。サービス提供者はその人のニーズが何か、フィーリングを感じるためにも、本人と話し合う必要があるのです。

過去には私たち抜きで話し合われました。「私たちに関することは私たちを交えて話し合う」これがスタンダード＝常識になるべきです。

その人が望む暮らしのために必要な支援が提供され、そのための充分な予算がつくべきです。

完全にインクルージョンな社会となり私たちが自分のことを決定できるようになることを望みます。ありがとう。

６月１８日　分科会　４．４．地域で自立して暮らすために

地域で自立して暮らすために

社会福祉法人あひるの会　あかね園
中　真宏

この分科会では、４名の方がご自身の経験をもとにお話をしてくださいました。登場したのは、デビット・コーナーさん（ニュージーランド）、リチャード・ラストンさん（カナダ）、スチュアート・リッグさん（イングランド）、アリエル・ウェイスラダーさん（コスタリカ）です。

◆自分の家とは？

一人目の発表者は、スチュアート・リッグさん（イングランド）です。イングランドでは、「ADVANCE」（ＮＰＯの組織）という団体があって、「地域の中で自立して生きていく」ための支援をしています。

「ADVANCE」が大事にしていることは、“Your own home and the right support”（あなたの家とあなたが求める支援）です。つまり、あなた自身に選ぶ権利があるのだ、ということです。「家＝住む場所」を決める時に、まず「どこで、誰と、住むかを選べなければいけない」そして、「誰のサポート（支援）を受けるかを決められなければいけない」ということが大切になります。

地域の中で自分の家を持つということは、

① 家はノックをして入る（＝家に入る人を選べる）
② 何を食べるか、何時に食べるか
③ インテリア（家具やカーテンなど）をどうするか
④ どんな音楽を聞くか
⑤ 誰の、どんなサポート（支援）を受けるか

ということを、すべてが自分で決められるということです。そして、お金が足りない場合でも、何人かで一緒に家を持つことで、その問題は解消します（shared　ownership＝家の所有権を分かち合う）。

人間は誰にでも、「最も適切なものを選ぶ権利があって、地域もそれに対応していくべき」だと、スチュアートさんは強く言っていました。

◆仕事をする意味

コスタリカのアリエル・ウェイスラダーさんは旅行代理店でオペレーター（電話応対）の仕事をしています。また、「KADIMA」という団体に入って、メキシコやアメリカなどでずっと活動してきました。

「KADIMA」は「成人として自立して生きる」ことや「みんなをインクルージョンする」ことを目的としていて、就労を目標にしています。

そのために、

① 能力開発（例えば、午前中はKADIMAで仕事の練習をして、午後から仕事に行くなど）

② 健康面のケア

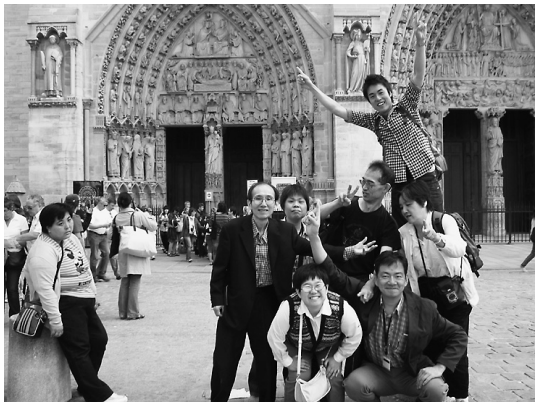
などに取り組んでいます。

最終目標を就労にしているのは、「就職して給料をもらうことは、尊厳を得ること（成人として自立すること）」と考えているからです。

さすがオペレーター（電話応対）のプロ！という堂々とした話しぶりでした。

◆一人ひとりの答えがあること

分科会の中で、おもしろい場面がありました。スチュアートさんが、聞いている人たちに「皆さんは、家を決めるときに近くに何があってほしいですか？」と質問したのです。会場からはいろんな意見が出ました。「コンビニ！」「電車の駅！」「スーパー！」「本屋さん！」「マック！」などなど。



東京都の本人と観光したときのようす

たくさんの答えがありましたが、そのどれもが正解なのです。人間は、好みも違えば趣味も違う、起きる時間も違えば食べるものも違う。一人ひとりがその人の答えを持っています。仕事も同じだと思います。「あなたは仕事を選ぶときに何を大事にしますか？」という質問があったら、いろんな意見が出ると思います。「その仕事が好きだから！」という人は、もしかしたら少ないかもしれません。好きな仕事に出会えることは幸せなことだと思います。仕事（会社）を決める時に、お給料を大事に考えた人もいるでしょうし、また勤務時間（何時から何時まで働くか）を大事に考えた人もいるでしょう。

一人ひとりの答えがあること、それを多くの人が知らないといけません。そして、そんな一人ひとりの答えが大事にされて、理解されて、尊重されることが、インクルージョンにつながるのではないでしょうか。

6月18日　ワークショップ　5．P4．健康のための権利

健康のための平等な（医療）アクセスについて

川崎医療福祉大学大学院
金　壽子

国際大会で唯一医療に関する話題が取り扱われていたワークショップのなかで、印象に残った二つの発表内容について、感想を含め簡単にご紹介します。

◆自分の痛みを他人に伝える難しさ

最初の発表者は、アイルランドから来ていたマンディさんとマンディさんの母親です。マンディさんはグループホームで生活しているダウン症の女性で、ボーイフレンドがいて、現在大学で国際的なニュースやいろいろな題材をもとに勉強をしています。彼女は発表の中で、健康を守るうえで、友人や家族やその他多くの人が関わってくれていると言っていました。そして、特に印象に残ったのが、「健康を守るうえで自分自身を的確に面倒みることが大事！」という内容でした。

マンディさんの母親も一緒に発表していましたが、ダウン症の人に起こりやすい加齢に伴う問題や、糖尿病や成人病など、医療の現場でなおざりにされている（ネグレクト）と訴えていました。また、もし、マンディさんが痛みを訴えたとしても、どこが痛いのか本人は痛い場所を指し示すことができないし、家族であっても、母親であっても、どのような痛みなのか説明をすることができないと言っていました。痛みに関することは二番目に発表したマーティン先生も指摘していましたが、どのように痛みを評価するのかがたいへん難しい問題になっています。また、母親はマンディさんが多くの人が入れ替わりサポートをしているので、その都度、対応が十分なされているのか確認を行っていると言っていました。なかには対応の悪い場合もあり心を痛めることもあるそうです。

マンディンさんの印象的な言葉のもう一つが、「お友だちとお母さんと家族と一緒に、健康で幸せでいたい！」という言葉でした。言葉そのものは単純なのですが、マンディさんが素直に本当に望んでいる姿が力強く、とても印象的でした。

◆各国の医療現場の現状

二番目に発表したのが、ドイツで知的障がい者の方の医療に直接かかわっているマーティン先生です。

発表の中で紹介されていた、ダウン症の方の平均余命の最近の研究報告によると、20世紀初頭から1980年代・1990年代・2000年の年代ごとの報告では、年代ごとに平均余命が1.7歳増加していると述べていました。

この数値の伸びを見てすごいスピードだとびっくりしました。日本人の平均余命でもこんな急には増加していません。

次にマーティン先生が紹介していたのが、知的障がいのある人がヘルスケアを受けるうえで多くのバリアがあると指摘していました。具体的には、病院へのアクセスや手術や特殊治療、医療者がてんかん発作や問題行動を恐れていたり、薬物治療に関する特別な知識の欠如、病院や手術などの時間管理や、ケアの質の欠如などです。

医療に関する問題の中でも、コミュニケーションの問題がとても大きいとマーティン先生は指摘しています。知的障がいのある人の多くがコミュニケーションに問題を抱えていることが多く、質の高いヘルスケアを提供するうえで足かせになっているということです。オーストラリアの研究報告で、医師がどのように知的障がいのある人に関わっているかという報告では「何が起こっているのか説明をしない」「何を彼らが言おうとしているのか聞こうとしない」「明らかにそうではないのに、理解している振りをする」などがあげられていました。これは多くの国で起こっており、日本も例外ではないと思います。

痛みの評価について、印象に残った事例は、28歳の男性でてんかんもあった人でした。彼は、腹部の痛みがひどくなって救急病院に行ったそうです。その時、状態をしっかり評価されずに、対応を後回しにされ、3時間後に医師が来たときには彼は既に亡くなっていました。その原因は心臓発作でしたが、コカコーラの瓶の蓋がお腹の中にあったそうです。皆さんこの状況をどのように判断しますか？　もしかしたら類似した事例が日本でも起こりうることだと背中が寒くなる思いでした。

「このような状況の中で何が必要なのか」、マーティン先生は次のように述べています。ヘルスケアの組織は、成人の知的障がいのある人のための特別な医療ニーズに合うよう、十分な時間、医師や専門家の特別な知識や技術を提供し、多様な専門的なアプローチを提供する必要があると指摘しています。

マーティン先生の発表の後の質問は、「救急で入院した時の対応」など、具体的で切実な内容でした。“万国共通の問題を医療現場は抱えている”と強く印象づけられた発表でした。

６月１９日　分科会　６．１．障害があってもなくても一緒に学べるようにするために

障害があってもなくても一緒に学べるようにするために

広島県手をつなぐ育成会
金子　麻由美

今回のドイツ・ベルリン大会では、テーマである権利条約を主軸に、いろんな分科会で話し合いが行われました。どの分科会も、発表者からの提案のあと、フロアーから質問や意見が熱く飛び交い、「障害のある人の幸せを願う気持ちは万国共通なんだ」と感動しました。

◆世界各国におけるインクルーシブ教育

さて、私は「障害があってもなくても一緒に学べるようにするために」という教育の分科会について報告したいさせていただきます。

この分科会では、どんな知的障害のある子どもも、特別支援学校ではなくインクルーシブな教育（統合教育：地域の通常学級で障害児と健常児を分けない教育）を受けさせるためにはどうすればよいかという話が多く出ました。

地域の学校で障害のある子どもが教育を受けるために、学校側からは

・建物をバリアフリーにするなど設備を整える
・特別支援学校を閉鎖して、いらなくなったお金を地域の学校に回す
・先生が一人ひとりの子どもたちに適切なサポートができるよう勉強をする必要がある

親からは

・学校から入学を断られると自尊心を失ってそれ以上言えなくなったり、子どもがいじめられはしないかと心配したりする
・セラピーばかり受けさせたりすることもやめて、もっとインクルーシブな教育へ歩んでいきましょう

などの意見が出ました。

ただ、どの発言からも、すべての子どものニーズに応えられる学校はどの国にもまだまだ少ないように感じました。

日本では、地域の学校でも、通常学級で勉強することが難しいときは障害児学級で

過ごす子どもが多いと思います。

私も、勉強がわからないのに子どもを1時間ずっと我慢して席に座らせているよりは、と息子に障害児学級を選びました。

私も会場の人たちに日本の現状を話したあと、「障害の重い子どもたちも普通学級でずっと過ごすために、どのような支援をされているのですか？」と、会場に向けて勇気を出して質問しました。

残念ながら、大会の最終日で時間がなく、答えが返ってこなかったのですが、会場を出るときにスタッフから「Inclusion policy」という1冊の冊子をいただきました。

◆障害のある子ども、ない子どもがともに学んだときに見られる効果

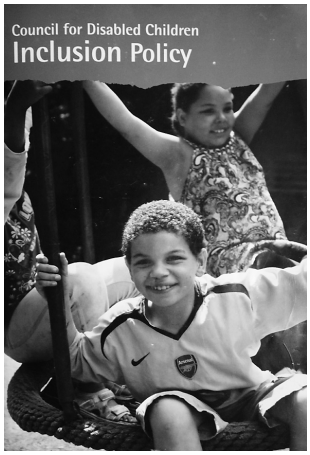
帰国後、その英語で書かれた冊子を友人に訳していただいたので一部を紹介したいと思います。

・他の子どもをなぐったり、おもちゃを取ったりするロバート。そこで療育グループに入れられてしまいますが、スタッフは彼をあたたかく受け入れ、信頼関係を築き、ロバートの得意なことを伸ばして自信をつけさせ、ほかの子と遊べるよう指導して、もとのクラスにうまく戻っていきました

・ルイスは脳性まひで車いすを使い、一人で動くことができません。体育は週2回ありますが、1回目は学生助手の援助を受けてみんなと一緒に授業に参加、2回目は理学療法士とするので、他の生徒は走るなどの授業をします

・私の子どもの学校では、すべてのスタッフ（教員・事務員・給食員・用務員など）が障害のある人の支援の仕方を学習します。子どもが何を必要としているか、どのように交流すればよいかを学校側がスタッフに教えてくれます

など、さまざまな試みが事例として紹介されていました。



『インフルージョン・ポリシー』の表紙

特に目を引いたのが、インクルーシブな教育が、障害のある子どもだけでなく、障害のない子どもにとってもよい影響を与えているということです。

・ウィリアム（脳性まひで、声を出して話すことができない子ども）の目の動きだけで、ナターシャ（障害のない子ども）は彼の望みをわかってあげられます。最初はウィリアムを怖がっていたナターシャだけど、彼のニーズをわかることが、

ナターシャに自信や信頼をもたらしています。

このほかにも、インクルーシブ教育を改善する援助と工夫が、弱い立場の多くの生徒たちを救っている事実、周りの皆も理解し成長していくようすがいろいろあげられていました。

◆インクルーシブ教育が実現するために

ちょうど現在行われている「障がい者制度改革推進会議」のなかで「障害の有無にかかわらず、すべての子が地域の小・中学校に在籍するのを原則とする」という意見が出され、賛否両論あることが新聞などで報じられています。

日本の福祉サービスは、以前に比べればとても豊かになったように感じます。しかし、いつまでも遅れていると感じるのは、差別意識や心のバリアフリーではないでしょうか。

それを考えると、子どもの頃からの統合教育でお互いを理解しあい、人として尊重する心が育てば、明るい未来が見えてくるのではないか、と冊子を見ながら思いました。

まずは学校側が障害のある子ども一人ひとりを受け止められるような整備をしっかり考えることが必要ですし、親もまた勇気をもって一歩踏み出さないといけないでしょう。また、その親が気軽に相談できるコーディネーターや仲間の存在も必要だと思います。

ドイツのイングリット・コーナーさんが、「どうしたら世界の多くの国々で、インクルーシブ教育が実現できるのか？　各国の報告書を書いてください」と会場に訴えました。

日本でも、成功例だけでなく、失敗例をどのように乗り越えていったかなど情報交換して、世界に発信していけたらと、育成会の使命を感じたドイツ・ベルリン大会でした。

また最後に、「Inclusion policy」を体調が悪いのにもかかわらず、快く訳していただいた富田さんに感謝します。

パリ市内で現地の人々と。

パリのルーブル美術館で。

6月19日（土）　分科会6．3．いつでも、どこでも、皆が参加できる社会をめざす

いつでも、どこでも、皆が参加できる社会をめざして

静岡英和学院大学
狩野　晴子

この分科会では、ノルウェー、クロアチア、ブルガリアの3カ国の発表者が、当事者、支援者の立場を越えて、各自が地域で暮らすために行ってきた取り組みに関する報告が行われました。また、分科会の途中で、「近くにいる人とこのテーマについて話し合ってください」と呼びかけがあり、発表者の報告を一方的に聞くだけでなく、会場の参加者も一緒に考える時間があったことが、とても印象的でした。

◆地域生活を変えることは、人々の考え方を変えること（ノルウェー：ヘレンさん）

ヘレンさんの発表は、とても印象的な問いかけから始まりました。それは「小さな施設とグループでの暮らしは、どこが、どうちがうのでしょうか」という問いです。どちらも、形だけ見れば、大きな建物ではなく小さな家に、少人数で暮らしています。しかし、どんな家に何人で暮らしているかが問題ではなく、どのようにサービスを提供するかが問題なのです。グループに対してサービスを提供したら、それは施設と同じであり、大切なことは、個人に対してサービスを提供することである、とヘレンさんは主張していました。

ノルウェーでは、知的障害者の施設は廃止されましたが、このグループに対するサービス提供を認める考え方はまだ残っているそうです。そこで、ヘレンさんたちは、「よい例を伝えていくことが地域の考え方を変えるために大切である」と、地域で暮らす8人の当事者の生活を紹介する本を作りました。ノルウェーでもまだ理解が進まない部分はあ

会場で話し合う参加者

りますが、人々の見方を変えることは、不可能なことではありません。そのためには、この本のように、よい実践例をたくさん見せることが大切だと述べていました。「どれだけお金を持っているかが違いをもたらすのではなく、私たちがどう考えるかが違いをもたらすのです」という言葉で発表は締めくくられました。

セナダさんの発表

◆セルフアドボケイトとして地域生活を語る（クロアチア：セナダさん）

二人目の発表は、人生の大半を施設で過ごした経験をもつセナダさんによる、施設の生活と地域生活に関する発表でした。

セナダさんは、高校卒業までを施設で過ごしていたそうです。卒業を期に家族の元に帰ったものの、仕事を見つけることができず、家族の経済状況も深刻化し、再び施設に入ることになりました。施設から出て、初めて障害のない人々がどうやって地域で暮らしているかを知り、どうして自分は皆のように生きられないのか、と思ったそうです。

施設では、自分のことを決めることができず、スタッフ（施設職員）が決めていました。セナダさんの気持ちをスタッフに話したところ、「あなたは、いい暮らしをしているのよ。働かなくていいし、食事も出てくるし、心配することもない。ホテルに暮らしているみたいじゃない」と言われたそうです。しかし、セナダさんはやはり他の人のように暮らしたいと強く思い、施設を出ることを具体的に考え始めました。そして、障害者支援をしている団体と連絡を取り、施設から出るための支援を求めました。

セナダさんは現在、小さなアパートを借り、気に入った仕事をして地域で暮らしています。地域生活は3年目になりますが、当初はとても大変で、多くの支援が必要だったそうです。しかし、現在は当時よりずっと少ない最低限の支援で生活しているそうです。

「私の人生は変わった。私の本当の生活は施設を出た日から始まった」というセナダさんの言葉が表しているように、本当の生活とは、決して楽な生活を意味するのではなく、そこに困難さや苦労を伴いながらも自分で決めることで、ほかの誰のものでもない自分自身の人生を生きていると実感できるものなのだと考えさせられた発表でした。

◆地域生活を達成するための家族の役割（ブルガリア：マリアナさん）

1989年の改革以前のブルガリアでは、障

害児が生まれると、医者から病院に置いていくように言われ、子どもは国境付近や山の上のような人目につかない場所に建てられた施設に入れられて一生を過ごしていたそうです。

しかし、1989年の民主化が大きな転換期となりました。親たちは、この時初めて他の国々と情報交換をし、子どもを取り戻す方法があることを知ったそうです。以降、他の国を訪問して、もっとよい暮らしができることを知り、多くの親へとその情報を発信しました。そして、ブルガリアに障害児のためのセンターを設立、後に大人のためのセンターを設立し、施設入所以外の道を拓いてきたとのことでした。これらの実践の中から、地域生活をするために大切なことは、情報の共有化であり、現在もさまざまなヨーロッパの国々の親と連絡をとっていると主張していました。

アジア太平洋地区のミーティング

大会３日目、国際育成会連盟の「アジア太平洋地区」ミーティングが行われました。全日本手をつなぐ育成会からは副島理事長、大久保常務、金子理事、長瀬国際活動委員長、袖山が出席しました。その他の出席者と、今後の活動について話し合われたことを、簡単に報告します。

日時：６月18日（金）７：30－８：45

場所：エストレルホテル

出席者（五十音順）

・ガドカリ（インド育成会代表）

・クラウス・ラシュウィツ（弁護士、ドイツ育成会事務局長、国際育成会連盟会長）

・クリス　カナダ・トロント（事務補佐）

・コニー・ローリー・ボーイ（カナダ育成会、国際育成会連盟事務局長）

・ジュリア・ホーキンズ（ニュージーランド IHC 支援者）

・デイビッド・コーナー（ニュージーランド IHC、国際育成会連盟理事）

・ティム・ガッド（イギリス・メンキャップ、国際育成会連盟会計候補）

・ラケル・ゴンザレス（イギリス・国際育成会連盟事務局）

・ラルフ・ジョーンズ（ニュージーランド IHC、国際育成会連盟事務局長兼会計）

・マヌエラ（国際育成会連盟ロンドン事務所）

議題

・アジア太平洋地域は地域的に広く、人口が多く、言葉の問題もある。組織がない。他は地区組織を通じて、各国への支援を行っている。

・2011年、各地域での地域フォーラムを開催予定。候補地として、インドや中国、日本など。可能性として、①場所を決めてたくさん人を集めて、言葉の問題をクリアする、②リーダー的な人を対象に少人数で開催する、③少人数の人を数カ国へ派遣する、④地域の中でグループ分けをする、など。

・インドでは2011年に人口調査を予定。パリバーとして他の団体とも協力していく。パキスタン、バングラディッシュ、スリランカと協力関係があり、ここにアフガニスタンも加わる予定。

・条約行動チームの中身。①インクルーシブ教育、②地域生活、③法的能力、④家族。e-mail を利用して情報共有をしているので、このチームに加わってほしい。次の世界会議はアジアのどこかで開催されることを希望する。

ウェルカムパーティと50周年記念パーティ

堺市障害者更生相談所
森　繁樹

◆ベルリンの街全体に感じたホスピタリティ

メルボルン（オーストラリア）、アカプルコ（メキシコ）、ベルリン（ドイツ）と育成会の世界大会には3回出席しており、会議はどれも素晴らしかったのですが、今回は本会議だけでなく、毎日複数の分科会に通訳者がいてくれたことは日本語以外は話すことのできない私にとっては、うれしい限りでした。複数の通訳者の手配などは大変だったと思いますが、育成会事務局にはとても感謝しています。会議だけでなくパーティーにおいても、司会等の通訳してくれたこともまたパーティーをより楽しむことができたので、ありがたかったです。

そして、まず印象に残ったのがベルリンはあらゆる場所がホスピタリティに満ちあふれていました。駅のプラットフォームで切符の買い方で戸惑っていたとき、デパートの食堂で閉店時間が過ぎていたのにもかかわらず対応してくれ、食べ始めた私たちが負担に感じないように何も言わずにゆっくりと食事をさせてくれるなど、さりげない親切はとてもうれしいものでした。

会議の中でも発言されていたことですが、あらためてサービスや支援のあり方というのは“誰のためのものなのか”というベースにあるべき意識、これが非常に大切なものであるのではないか、と考えさせられました。

◆とにかく盛り上がっていた

さて、2日目に催されたウェルカムパーティーはテーブルが用意されていましたが、立ってうろうろとしている人の多いテーブルや、座ってじっくり話し込んでいる人のいるテーブルなどがありました。ケーキのサービスや料理を持ってきてくれたのかと思いきや、急にゲームが始まったり、突然手を取られて連れて行かれ一緒に踊らされたり、サービス精神が旺盛でしっかりと楽しませてもらいました。舞台上ではライブが行われ、会場内では絶えずどこかで音楽が流れ、登山姿をした数人がホイッスルを吹いてパフォーマ

ンスをしていたかと思えば、ドラムの演奏隊が会場のいろいろな場所で演奏していたり、また別の場所ではアコーディオンやホーンを演奏する人がいたりと、会場全体が音楽祭のような雰囲気でした。

◆記念パーティは夜中まで

次に育成会50周年の記念パーティーの開始時間は夜7時から、なんと夜中の12時まで行われていたのには驚きました。最終電車の関係で最後までいられなかったのが残念でした。

このパーティーでも、会場のどこかで行われているライブ演奏の音が響き渡っていました。演奏している中には多くの障害者もいましたが、本当に楽しそうに音楽を奏でていました。たまたま一緒になったテーブルには、ドイツ人の男性が同席しており、自分のつたないコミュニケーション能力でボツボツと交流を深めたりもしました。

時間が経つにつれ、舞台前方ではテーブルを片付けスペースを作ってダンスが始まっていました。言葉がなくても心を通わせることのできる音楽は素晴らしいもので、プロジェクターには歌詞が映し出され、生演奏に合わせていろいろなダンスが繰り広げられていました。

国や障害に関係なく、みんなが楽しんでいる、インクルージョンというのはこういうことではないか、という思いを抱きつつベルリンの夜はふけていきました。

〈大会のパーティーの中から〉

大がかりなパフォーマンス

盛りあがるパーティーのようす

神出鬼没のドラマーたち

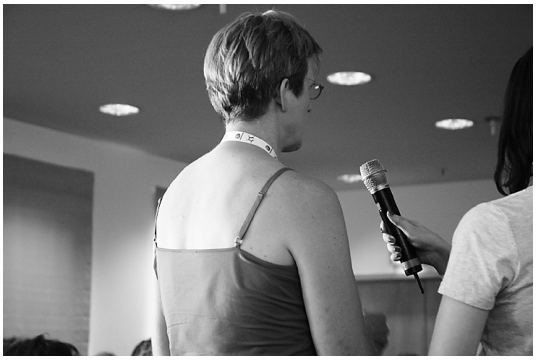
国際育成会連盟ベルリン大会と当事者の力
―当事者主体の流れの中で―

全日本手をつなぐ育成会本人活動推進委員会
花　崎　三千子

◆メキシコ大会で示された新しい運動モデル

メキシコ（アカプルコ）で開かれた前回の世界会議は、国際育成会連盟が知的障害当事者をその運動の中心に据えたことを強く印象づけた会議でした。そうすることで、当事者、家族、専門家が真のパートナーとして連帯していくことの可能性と重要性を示しました。当事者はそれほどエネルギッシュで確かな影響力を会議に与えていました。

最終日の「会議総括（まとめ）」の場面では、各国の当事者代表が準備した「本人決議」が発表され、それがそのまま「会議全体の最も重要な宣言」となったのです。はじめの予定にはなかったのですが、会議の中で活躍する日本の当事者の力に注目した大会事務局の要請で、日本の代表もこの決議の作成と発表に加わりました。



発言する当事者。入所施設から地域生活への分科会にて。

結果的にメキシコ大会はいわば国際育成会連盟の新しい運動モデルを示したものとして注目されることとなりました。

◆「自分の大会だ！」と、誰もが実感できたベルリン大会

ベルリン大会には、障害のあるなしにかかわらず、誰もが「これは自分の大会だ」と実感できるさまざまな企画（アクセシブルキットや会議の難易度の表示、好きな色や形で自分を表現するアートコーナー）が用意されていました。各国が自慢の作品やパンフレットを並べる展示広場は、広いスペースが用意されていたにもかかわらず、いつも人でいっぱい。目で見、手で触れながらお互いを理解する絶好の広場でした。自分のことを自由に話せる「スピーカーズコーナー」も人気でした。分科会で報告するのは気が重いけれど、誰でも言いたいことがいっぱいあるのです。あらかじめ申し込んでおけば、そのための場

所と時間が用意されているこの企画は、素晴らしいものでした。札幌から参加した冨田さんが自分の暮らしや家族の問題について報告すると、カナダのピープルファーストの人たちが熱心に聞き入り、質問や意見が次々に飛び出しました。隣では白い民族衣装に身を包んだ一団が、通りかかる人々にアラビアコーヒーをふるまっています。立ちのぼる薫り高い湯気をはさんで握手や抱擁。これもまた忘れがたいコミュニケーションの場面でした。

◆見えにくかった表舞台での当事者の活躍

ベルリン大会は、国連障害者の権利条約締結後初めて開かれた世界会議でした。また、国際育成会連盟設立50周年を祝う祝祭の場でもありました。その喜びを分かちあい、連帯の力強さを確認し、それを持ち帰ることによってそれぞれの国や地域を変えていこう。これがベルリン大会の基本的なコンセプトであり、その意義は十分に確認できた会議でした。

しかし、私の個人的な感想かもしれませんが、そのなかで、当事者を中心に据えつつ、当事者と家族・専門家が連帯して権利を勝ち取ってゆくというメキシコ大会で示された新しい運動モデルは、あまり鮮明ではなかったように思います。どの場面にも当事者の代表が親や専門家と一緒にステージに上がってスピーチを行いました。しかし、その力が全体をリードする構造には、残念ながら、なっていなかったように感じました。この大会が記念大会として欠くことのできない式典部分に相当の力を割いたこと、そして12年ぶりにヨーロッパで開かれた大会として、ヨーロッパ、中近東、アフリカをはじめ世界中から2700人もの人たちが参加し、これまでにない規模の大会になったことなどが、表舞台でプログラムをリードするという意味での当事者の力を見えにくくしたのかもしれません。

◆当事者こそが中心、そして力強いパートナー

しかし、会場のどこを見まわしても当事者の姿があふれていました。表舞台で活躍しなくても、文化活動や観光プログラムも含めて通算5日間の会議の中で、彼らの存在は実に大きく、そのトータルな存在感そのものが会議全体に大きな影響を与えていたのは確かです。当事者の持つ直接的で圧倒的な力が物事を動かすことがはっきり感じられました。彼らの存在こそがそのまま力であり、変革のパートナーなのです。

問題は、親や専門家が当事者の持つこうした潜在的な力にどれだけ敬意をはらい、その運動の中心に位置づけるかということです。そして、そのための手立てを組織変革も含めてどれだけ大胆に組み立てるかということです。こうしたところに日本の育成会運動の今後の可能性がかかっていることを改めて考えさせられた大会でした。

どんな権利があるのかを考えよう

東京都知的障害者育成会本人部会ゆうあい会
館森　久秋

◆自分らしく生きていくためのレシピ

世界会議がドイツ・ベルリンでありました。6月15日にプレ会議があり、16日から19日まで会議があり、開会式ではダイアン・リッチラー会長のあいさつがあり、「全世界の障害のある人たちが、共通に自分らしく生きていくためのレシピが必要です」と話がありました。

16日午後には分科会「障害者の権利条約の背景と現状」（どのような権利があるのか、なぜ条約が必要なのか）で、まず最初にニュージーランドのデビット氏から、国連とは何か、国際協力を達成するため設立された諸国家の組織であり、多くの国が加盟しています、と説明がありました。

◆どのような権利があるでしょうか

地域で暮らす権利、教育を受ける権利、健康に対する権利、仕事をする権利。

私たちが地域でくらすには、何が必要でしょうか。どこに住み、どんな仕事をして、どんな生活をしていけばいいのでしょうか。

問題がおきたらどこへ行けばいいのでしょうか。

そういう時こそ「本人活動」が必要だと思います。

友だちを作り、なやみをうちあけたりして友好を深めることが必要だと思います。

◆そのために、どうしたら良いでしょうか。

まわりに良い支援をしてくれる人がいるでしょうか。またどのような支援が必要なのでしょうか。必要な支援を訴えていくことが必要です。

何が必要でしょうか。地域で住むにはグループホームがありますが、良い仕事があるでしょうか、そのためにはどうしたらいいでしょうか。

ニュージーランドのデビッド氏から、ニュージーランドは最低賃金以下でした。でも運動を強めていると、言っていました。

健常者も障害者も共に地域で暮らしていくことが必要です。

分科会で発表する館森さん。

育成会世界会議ドイツ大会

トゥモローくしろ
杉澤　哲哉

◆1日目：6月15日

午後から本人のための準備会議に参加しました。グループに分かれ、私はUAEの本人やカナダの本人たちと同じグループになり、次のような意見が出ていました。

●友人を作り、世界の本人活動を知り、自分たちの本人活動に生かしたい。

●生活していて楽しいことや、困ったことを知りたい。

●本人活動の内容を知りたい。

●カナダの人たちからピープルファーストの活動を学びたい。

●すべての事柄を人間としてあつかわなければいけないし、人間はあるがままの姿を受け止めなければいけない。

また、「平和に一緒に住む事が大事でもいためつけられたなら？」という質問があり、「暴力を受けない自由というのがあるので違法行為として訴えられる」と答えたり、「ニュージーランドでは仕事をするとちゃんと給料がもらえますか？」という質問に、「一部では最低賃金以下しかもらえない」など、さまざまな国の人で議論しました。

ちなみに、障害者権利条約は複数の障害を持っている人でも対象になるようにできている（作られている）し、前文では家族の役割についても謳われています。

また、ザンビアのクインシー・ミウィヤさんのプレゼンでは、

●家族は、本人が成長していくうえでのサポーターなのでお互いに大事にする

●誰かに違法行為を受けた場合は、プロトコールと言う不服申し立てができる

という発表があり、参加者からは

●オーストリアでは独立した生活ができていない

●買い物がしたくても後見人がノーと言えばできない

●結婚したくても後見人がノーと言えばできない

●地域で住む権利は誰にでもあるのに、ドイツの中央部に住む本人のほとんどは作業所での仕事しかさせてもらえないのはおかしい

という意見がありました。

◆レセプションパーティ

まず、楽器演奏があり山登りをするときの格好をした5人組が笛を吹いて、メイドの格好をした人がチョコレートを配り、工事をす

る格好をした人が歩いたり、花を積んだ屋台を引いたり、騎兵隊の格好をした鼓笛隊の行進があったり、ナースの格好をしたダウン症の男性がメイドと救急隊の役をしていました。

食べ物は、パンが２種類、ミニハンバーグ、パプリカと人参と大根のスープ煮、トマトとパセリとチーズの串、ぶどうとパセリとチーズの串。飲み物は赤ワイン、白ワイン、赤スパークリングワイン、白スパークリングワイン、炭酸水、オレンジジュースでした。

◆2日目：6月17日

全体会３：家族と本人が一緒に活動して、障害者の権利条約を実現しよう

・ミア・ファラーさん（レバノン）

●親や政府、教育分野の理解が必要

●メディアは本人の能力を知らせる役割を担って欲しい

●本人の能力、スキル、親のスキルは地域で生きていくのに重要

●本人が自分のできること、変えたいことを自ら言ってきた

●レバノンの法律は権利についてかなり謳っている

・エレナ・デルボーさん（アルゼンチン）

●障害者の声を聴くことが大事

●差別を受けずに同じように学校に通えることが大事

●本人の責任能力によってサポートの内容も変わる

・マル・ドライヤーさん（ドイツ）

●行動計画のなかに権利条約をどう入れるかが問題

●さまざまな設備や施設でサービスを提供している団体が多くある

●条約を実行することがゴール

・ローンズ・アゼルマイヤーさん（ドイツ）

●所属している団体の関連団体が680もある

●どんな人であれ障害者に対する対応を変えなければいけない

分科会3.1.：本人活動のエンパワーメント、自分で声を出す力を得よう

司会：アンドリュー・ドイルさん（スコットランド）

プレゼンター：デビッド・コナーさん（ニュージーランド）、ミア・ファラーさん（レバノン）、クインシー・ミウィヤさん（ザンビア）、ハイデー・バックス（パナマ）

・デビッド・コナーの意見

●エンパワメントのことを話す前にセルフ・アドボカシーの説明を簡単にします

●セルフ・アドボカシーは権利擁護のことで、みんなの重要なことを伝えるのが大事です

●エンパワーメントは権利主張のことで、もっと強くなろうという意味も込められている

・クインシー・ミウィヤの意見

●自分たちのことを主張するのがエンパワ

メント

・ハイデー・バックスの意見

●パートナーシップとは、いろいろな人が集まり、共に議論、作業すること

●いくつかの団体に所属していて、女性の障害者団体にも所属していて、女性障害者の権利も訴えている

・参加者の意見

●1994年にハンブルグでピープル・ファーストを立ち上げたがうまくいっていない

●ツールの使い方について話したい

●情報をわかりやすく伝えることと、いつでも入手可能な状態にするのが大事

●ルールとして返信、加工する前に使う人を参画させて加工することと分かりやすい言葉、短い言葉でまとめる

◆4日目：6月18日

全体会4：家族と本人が一緒に活動して、障害者の権利条約を実現しよう

・ロベルト・レアル（アメリカ）

●権利を促進する事で障害者も他の人と同じように権利を生かせる

●インクルージョンに対して声を上げることで目指していることを達成するきっかけになる

・ヨハン・テンゲゾンダム

●グローバライゼーションとはお互いの国が助け合うこと

●EUには障害者の求めるものを反映してもらうことが大事

分科会4.4.：地域で自立して暮らせるために

・デビッド・コナー（ニュージーランド）

●ニュージーランドの本人は、みんな自立を目指しているし、自立ができている本人も多い

・スチュワート・リグ（イギリス）

●「ADOVANSE」という団体があり、地域で自立生活のサポートをしている

●イギリスでは約600人の障害者が家の所有権を持っている

・リチャード・ルソン（カナダ）

●カナダのピープル・ファーストに所属している

●政府は施設に入れれば安全だと思っているが、入れられたら、何もかも決められてしまうし、親も施設まで会いに来られない

●自分の好む地域生活を実現してくれることが、インクルージョンだと思っている

・アリアル・ワイスナター（アメリカ）

●「Kadima」という団体で活動している

●本人活動家としても活動していて、彼女も本人活動家

●旅行代理店のオペレーターのような仕事をして、旅行時の航空券の発行もしている

●両親がメキシコにいたため、ヘルプをなかなか得られないのがバリアになっていた

●キャパシティービルディングという能力開発を「Kadima」では行っている

●このプロセスを経て就労につながる

全体会5：完全な市民権について

司会：デビッド・コーナー（ニュージーランド）

・スィー・スワソン（アメリカ）

●生活をしていく中での権利を考えるのが重要

●生活する権利、健康を守る仕事をする権利なども大事

・マーク・ゴードリング（イギリス）

●学習障害の人は健康が悪いにも関わらず、適切なサービスがない

●マーク・ライアンという学習障害を持っている人が入院して26日で死んだ、その理由は食事を与えられなかったから

●「ゲット・イン・ライト（それを正しくしよう）」を掲げて今年7月に権利に関するキャンペーンを行う

・ケニス・エキンドウ

●世界で2500万人の障害者が教育を受けられていない

・ピーター・マーシュ（ドイツ）

●ドイツでは憲法がどんなものなのか明確にれていない

●教育を受けるための適切な判断が必要

◆コングレイスパーティー

鼓笛隊による演奏をしながらの行進と歌、KARAVANABandというデンマークの音楽ユニットによる歌。

食べ物は、パン、生野菜、マカロニ、ビーフシチュー、ゆでじゃがいも、いももち、サーモンのクリーム煮、オペラアイスクリーム。

飲み物は、炭酸水、オレンジジュース、コーヒー、緑茶、ビール、赤ワイン、白ワイン

◆5日目：6月19日

分科会6.7.：いつでもどこでも皆が参加できる社会をめざす

司会：クインシー・ミウィヤ（ザンビア）、ヘレン・ホーランド（ノルウェー）のプレゼン

●私の息子はダウン症です

●20年前に法律を改正し、個人サービスを充実させるようにした

●法律は変えても人の態度が変わらないのが一番の障壁

●グループへサービスを提供するよりも個別にサービスを提供したほうがコストをかけないですむ方法をいくつも知っている

・セタナ・ヘリシビック（クロアチア）

●自分では何も決めさせてもらえず、すべてスタッフが決めていた

●スタッフに地域で暮らしている人よりもいい生活をしていると言われた。その理由は仕事もしなくてもいいし、料理も作られたものが出てくる。まるでホテルで過ごしているようじゃないかと言われた。

●施設で暮らす知的障害者の人にも本当の生活を知ってほしい

・マリアナ・ブランザロバ（ブルガリア）

●ソーシャルケア・ホームで人間の尊厳を守るための仕事をしている
●「障害のある子が生まれたら病院に残しなさい」と言われた。その理由は障害のある子の育て方を教える情報がなかったから
●パデックという団体に所属して活動している

◆閉会式

ビデオ上映会では大会初日から4日目のコングレイスパーティーまでのようすが上映されました。その映像に私も映っていてちょっとうれしかったです。そのあと、ダイアン・リッチラーさんの結びの言葉があり、そのなかで、1971年に働き始めた当時、グループホームという制度が新しいと思ったと言っていました。そのあとにランバ・サンバという知的障害のある人とない人のバンドによる歌がありました、

大会を通じ、多くの人と出会い、多くの情報を知る事ができて私にとって大きな収穫となりました。

得たものが多かった、2度目の世界会議

スワンカフェ＆ベーカリー札幌時計台店
三塚　勇太

◆2度目の世界大会

6月12日にジャンプレッツの皆さんと、職員と一緒にドイツ・ベルリンの世界大会に参加しました。育成会の世界大会は4年に一度あり、僕は前回のメキシコ・アカプルコの大会に参加したことがあったので、前回参加した人たちに会うのがすごく楽しみでした。そして今回は、前回より多い人数で行くことが決まっていて、ジャンプレッツの参加者のほとんどが初めての海外だったので、皆さんのサポートができればいいな、と思い参加を決めました。ジャンプレッツのグループは2グループあり、先に行くグループで僕は行動しました。

◆日本の人たちと合流し、ベルリンへ

1日目は、札幌駅から新千歳空港に向かいました。そこで前回の大会でお世話になった光増さんと合流し、光増さんが先頭になって飛行機で成田空港に向かいました。皆さん国内の旅行は慣れていたので、安全に成田空港に到着し、その日は成田のホテルで一泊し、2日目の朝に成田からパリに向かいました。

飛行時間は13時間の長旅で、小さいトラブルがありながらも無事にパリの空港に着きました。そこで、日本のさまざまな地方から参

5．本人参加：2）日本から参加した本人の感想

加した人たちや旅行会社の添乗員と合流しました。ほとんどの人が前回の大会で一緒だった人だったので、積極的に皆さんと交流ができました。その後、飛行機でベルリンに向かい、2時間以上かけてホテルに着きました。前回と同じくらいの豪華なホテルに感動しながらも、皆さんが時差に慣れていなかったので、ミーティングの後、その日はすぐ寝ました。

3日目は、ジャンプレッツの第2グループと合流し、プレ会議に参加しました。プレ会議には、10カ国ぐらいの人たちと数グループに分かれ、それぞれ参加した理由などを話し合い、交流を深めました。そこで僕は、グループ内で話し合ったことを（かなり緊張しましたが）なんとか発表することができました。

開会式は、約50カ国くらいの人たちが参加していて、各国の当事者の人たちが自分の国の国旗を持って入場し、豪華な演奏の後、国際育成会連盟の代表の開会宣言などがありました。規模が大きな開会式でしたが、グループの人たちも参加しやすい雰囲気でした。その夜、ウェルカムパーティーに参加し、バンド演奏やパフォーマンスで盛り上がり、いろいろな国の人と名刺や写真を撮ったりと、交流しました。

◆海外の人と積極的に交流

4日目以降は、分科会はそれぞれの国の名前のフロアで同時に行われており、日本語の通訳が入っている分科会に参加しました。分科会は全体的にビデオやわかりやすい例えで行われていて、とても参加しやすいものでした。特にほかの国の人たちは、意見を言うときに主張がとても強く、本気で訴えかけてる感じがすごく伝わってきました。

分科会のあとは、ジャンプレッツの皆さんと「ポツダム会議」が行われたツェツィリンエンホフ宮殿やサンスーシー公園などを観光し、スピーカーズコーナーでジャンプレッツの冨田さんのスピーチを見に行きました。冨田さんはこの日のために職員さんと念入りな打ち合わせと練習をしていました。本番では、たくさんの人が来てくれた中、自分の生い立ちをしっかり話していて、スピーチ後ではたくさんの質問がありありました。

最終日前日に大会記念パーティーに参加しました。そこではオープニング以上に豪華な料理と、現地の当事者パフォーマンスが行われ、みなさん大盛上がりで、夜遅くまで続いていました。

翌日、閉会式も終えたあと、近くのデパートでお土産を買いに行きました。その間、添乗員さんのサポートのおかげでいいお土産をたくさん買えました。そして、添乗員さんを先頭にパリの空港に向かい、いろいろ細かいトラブルもありながらも無事に成田に着きました。添乗員さんと別れた後、成田で一泊し、光増さん先頭に札幌まで安全に帰れ

ました。そして、グループの解散式を終えたあと、真っ先に「むぎのこ」に向かい、報告とお土産を渡したらみんなとても喜んでいました。

今回の旅では、職員さんを始め、たくさんの人のサポートの中で快適な旅行ができて、得たものがとてもたくさんあったいい旅でした。

仲間と楽しい、フランス・ドイツの旅

新発田市手をつなぐ育成会・本人の会スマイル
高柳　健

◆まずはフランスへ

私は６月にあった国際育成会連盟の世界会議にドイツとフランスに行ってきました。フランスは街が大きくて、街の中に馬車がいました。観光や買い物、見物をしました。エッフェル塔が一番思い出に残っています。フランスの三越デパートでお母さんに口紅を買いました。隣の店でラーメンを食べました。

◆世界会議と観光

ドイツでは世界会議に参加しました。いろいろな国の人たちがいて緊張しました。会議の内容は私には難しかったので、よくわかりませんでしたが、よその国の人たちがたくさん意見を言っていたのですごいと思いました。最後に私の好きな絵を描くことができました。自分の好きなものを描いてもいいと言われたので、私は新発田市で「よさこい」のチームで旗をふっているので、鳴子の絵を描きました。絵はステージの横に貼ってもらいました。

ドイツでおどろいたのは、信号機が横についていました。私はドイツで信号機の中の絵が描いてあるＴシャツを買いました。他にビールを買って飲みましたがとてもおいしかったです。ソーセージも食べました。支援者の樺沢さんと佐藤さんと仲間の常木さんと一緒の旅行は楽しかったです。

アートコーナーで絵を描く高柳さん。

鳴子の絵の完成です。

4年後も参加したい

新発田市手をつなぐ育成会・本人の会スマイル
常木　大輔

◆大満足だった旅

僕は、6月13日から8日間、ドイツのベルリンへ行って来ました。初めての海外、国際育成会連盟の世界会議に参加しました。開会式と分科会と大会記念パーティーと閉会式に出席しました。内容は、むずかしくてあんまりわからなかったけど、いい勉強になったと思います。世界の人と交流してうれしかったです。

次に、観光についてです。まず最初に、フランスに着いて、エッフェル塔や凱旋門を見学しました。次の日に、ドイツに入り、ブランデンブルク門やベルリンの壁、磁器で有名なマイセン、ドレスデンの町を見ました。日本の風景と全然違って感動しました。あと、写真をいっぱい撮りました。ドイツのビールや料理を食べました。おいしかったです。

◆ドイツのマクドナルド

僕はマクドナルドで働いているので、ホテルの近くのマックに行ってセットを買いました。初めて海外のマックに行って勉強になりました。貴重な思い出になりました。次は4年後、また参加できたらいいなあと思います。皆さんもぜひ参加してみてくださいね。

ドレスデンにて

ドイツ・ベルリン大会に参加して

湘南にじ
植松　さやか

私は、はじめて、世界大会に参加しました。さいしょは、きんちょうしました。開会しきの時、いろんな国のはたを見たときに、これからはじまるんだな、と思いました。ドキドキしました。私は、けんりについてのべんきょうをしました。自分のことは、お母さんよりさきに自分できめるとべんきょうしました。絵もかきました。「JAPAN」とかいてう

れしかったです。絵をはってもらってしゃしんをとりました。あとは、ベルリンのところにも行きました。ベンツにのって、音楽を聴きに行きました。私は、寝てしまいました。電車にも乗りました。犬や自転車がのっているのでびっくりしました。ゲットーやベルリンの壁ののこりもみたり、ペルガモンに行ったり教会にも行きました。ホテルでイギリス人と知りあいになりました。よかったです。サッカーもおうえんしました。

アート作品の前にて。

ドイツ・ベルリン大会に参加して

東京都知的障害者育成会本人部会ゆうあい会
中村　悠未

◆びっくりすることがたくさん

6月15日、本人のための準備会議に出席しました。7～10人くらいのグループで、大会について話し合いました。開会式、いろいろな人のあいさつの話はむずかしかったです。各国の旗の入場、日本の旗をもちたいと思いましたが、ジャンケンでまけてしまい残念でした。

お昼ごはんはサンドイッチ・スープ・パスタみんなおいしかったです。お水は炭酸水ばかりでした。いつも立って食べていました。お休み時間の時のコーヒーとプチケーキがとてもおいしかったです。

ドレスデン・マイセンに行きました。長い時間バスで走っても風力発電の白い風車と畑が続いていてドイツは広いと感じました。トイレに入るのにお金を払わないといけないのでビックリしました。広場をかこんで建っているので、おとぎの国の城のようでした。石の道なので歩きにくかった。マイセンでは、ステキなお皿や花ビンがありました。

◆話し合いの内容はむずかしかったけど

日本のブースでお店番をしながら、折り鶴を折っていたらたくさんの外国の人があつまってきました。できた鶴の折り紙を手にもってジーっと見ていました。

日本語の通訳を聞くイヤホーンを長い時間つけていると耳がいたくなってしまいましたが、一生けんめい聞きました。

大会パーティーの時、同じテーブルのドイツの人たちと少しだけ楽しい話ができました。

受付の時、もらったカード・レッドカード＝八角形（わかりません）・イエローカード＝四角形（少しわかりません）・グリーンカード＝三角形（わかりました）の中で私はイエローカードかな…？　です。

袖山さんの話で、仲良く助け合うことが大切だと思いました。でも、ほかの国の人たちの話を聞いて、日本はいろいろなことで、めぐまれているかもしれないと思いました。

これからは自分のことを自分で決めて自分で言えるように、がんばりたいと思います。

大会会場にて

ドイツ・ベルリン大会に行って

神奈川県本人の会希望
小長谷　英高

前回メキシコ大会より参加者がおおかったのでびっくりしました。

今回は、袖山さんの話をききました。「将来の生活」というはなしがありました。

ぼくは、このはなしをきいて思ったことは、とてもたいへんだということでした。障害者の人たちの学校がすくないために学校にいけない人たちがいるというはなしがありました。

「地域でどのようにくらしたいか」というはなしがありました。障害者たちがくらす、グループホームがすくないという、はなしがありました。

ぼくは、障害者がくらすためにはもっとグループホームをたくさんつくればいいと思いました。カナダの人たちもグループホームをつくればいいとはなしをしていました。

開会式で日本の旗を持ちました

札幌みんなの会
野宮　裕道

◆思いがけない日本代表

僕が初めて世界大会に行ったのは第14回、2006年11月にメキシコのアカプルコで開かれたときです。その時「今度はドイツ大会で会いましょう」と何人かの人と約束をしました。

あれからもう４年が過ぎて、今年2010年６月にドイツのベルリンで第15回世界大会があり、今回も母と一緒に参加しました。

なつかしい人に会えて話ができたり、新しく友だちもできてよかったです。皆、頑張っているんだなあと思いました。

前の時より３日間長い11日間の旅でしたが、たくさんの思い出ができました。その中でも一番は、僕が開会式の時、日本の旗を持ち参加して、他の国の人と一緒にステージに上がったことです。どうして僕になったかというと、ジャンケンで勝ってしまった、ただそれだけのことなのです。

「ジャンケンで決めるよ」と言われて、僕が持つ気はぜんぜんないので離れていると、「集まって」と僕の近くに人が寄って来ました。ジャンケンがはじまり、人が減っていって３人になった時、困ったと思いました。そして、僕が勝ってしまったのです。

◆いざ、本番！

旗を持つ人が集まってリハーサルをしました。翌日本番になり、とても緊張しました。でも、旗はあまり重くなかったです。次々にステージに上り、旗を立てて正面を向いて全員が終わったらおりてきました。アッと言う間に終りました。母は僕より緊張したそうです。

とてもいい経験をすることができて、本当にありがとうございました。これからは、自分で進んでやろうと思うようになりました。

大会に参加して本当によかったです。大会に参加した皆さんお元気ですか？　僕も元気で仕事を頑張っています。

16回目の開催地はまだ決まっていないようですが、またお会いしましょう。

日本の旗をもってステージにあがりました。

ドイツ・ベルリン大会に参加して感じたこと

東京都知的障害者育成会本人部会ゆうあい会
宮本　佳津子

ベルリン世界会ぎに私は、さんかをして私が思ったことは、日本のくには、私たちがしせつにはいってもおぼんとくれには、いえに帰ってこられるのにアジアのくには、こどもがしせつにはいったら、いえに帰ってこられなくて、ずっとずっとしせつの中でくらさなければいけないなんて、私はとてもびっくりしました。

１回でもお父さんやお母さんやきょうだいにあわせてあげないなんて、なんだかあんまりにもひどいなと思いました。りょうしんがびょうきでなくなったならはなしがべつだけど、まだりょうしんがいる人は、１回でもあわせてあげたいとおもいました。私だったらもっといいしせつをさがして、なかったらこどもをいえにおきたいと思いました、とてもびっくりしました。このはなしをきいて私は、日本にうまれてきてよかったとつくづく思いました。お母さんにかんしゃしています。

右端が宮本さん。

がいこくより日本のくにのほうがしょうがいしゃの人たちがはたらくところがたくさんあって、とてもめぐまれているんだな、とつくづく思いました。作業所は、たくさんあるし、わかばふくしえんみたいなところは、たくさんあるし、日本のくにのほうがめぐまれているんだなと思いました。私もお母さんと２人でくらしています。

私は今、飛鳥作業所からしょうがいしゃセンターでせいそうの仕事をしています。でもいまは、お母さんといっしょにくらしているけれども、いつか一人になったら、せいかつりょうみたいなところに、はいらないといけないのかと思うときがあります。でも作業所のきゅうりょうとセンターのきゅうりょうで６万５千円ぐらいで、しょうがしねんきんをあわせてもとてもたりません。せいかつりょうでも１カ月８万円か９万円ぐらいかかるのかと思います。

なんでも、ものがあがっているからたかいし千円では、かえないし千円のが千五十円だし私もかんがえてしまいます。私もおねえさんがいます。おねえさんといっしょにく

らしたいけれども、私がはたらくばしょがあればいいけれども、しょうがいしゃセンターみたいなところではたらきたいです。そこではたらいて、少しでも私は自分のこずかいほしいです。

でも私もいっぱいふまんはあるし、なやみもあるし、いっしょにはたらいている人にりかいしてくれる人がいたらありがたいなと思います。私だけふまんやなやみをかかえているわけではないのはわかっているけれど、今いっしょにはたらいている人みたいに、りかいしてくれる人がいたらいいなとおもいました。そうしたらおねえさんといっしょにくらして、いいところがあったらそこではたらきたいです。人にみえないところだから、つらいときもあります。北区みたいに心のやさしい人がいっぱいいたらいいなと思いました。

サイコーの思い出

明るい立山の会
廣世　美帆子

◆遠かったベルリン

富山からＪＲはくたか、MAXとき、成田エクスプレスに乗り、成田まで行きました。フランス・パリで一泊。遠い遠いところでした。エッフェル塔はすてきでした。ピンクの帽子を買いました。エッフェル塔のマークが入っています。チーズ、ヨーグルト、生ハム、パンとワイン、ブランデー、ビールはおいしかったです。サービスが楽しみでした。大会の会場があるベルリンに4泊しました。日本とちがって食べ物、手洗い、トイレなどの生活のちがいについて考えました。開会式で「日本から遠かったですね」と言われ、本当に遠い所に来たと思いました。

◆世界中の人と楽しく交流

夜、9時半でも昼間のように明るくてびっくりしました。温度も、暑くなったり寒くなったりしてあれこれ服を着ました。本人部会では、自己紹介をしたり名刺をもらいました。ダンスや歌をうたって夢をもちたいことを発表しました。パフォーマンスでは、タイコでリズム、山登り、洗たくしている人、料理をしているところなどあり、コーヒー

イングリッド・コーナーさん（インクルージョン・ヨーロッパ会長）と廣世さん親子

タイムには、アコーディオンをひいてくれて私は「なるこ」を手に持っておどりました。楽しかった。

日本からいっしょに行った人や、外国の方に私の仕事、会社のおかし、宝屋の「雪渓」を食べてもらいました。「スイーティー」と言われてにっこりの私でした。ふしぎそうにたべてました。本人どうしで夫婦で参加していて仲良しでした。家族なかよく、みんな、世界中の人とお友だちになりたいと思いました。楽しかった。がんばってお仕事して、また行きたいです。

ベルリン大会で楽しかったこと

松戸コアラ会
岡本　義和

ドイツ　ベルリン大会に行って来ました。

ワークショップとか、交流会に参加しました。事前に英語の名刺をつくっていったので、海外の参加者たちと名刺交換もしました。

会議にも参加しました。

植松さんとパリ市内観光に行ったりしました。

エフエフル塔にも行きました。

肌の色の違う人と友達になりました。言葉は通じないけれど、みんないい人でした。

鉄道にも乗りました。写真も撮りました。たくさん取りました。鉄道の写真を335枚撮りました。

その中からお気に入りの写真を、紹介します。

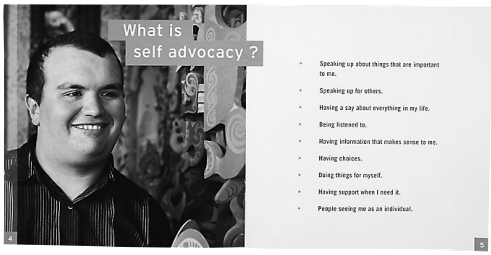
〈岡本さんが撮影したドイツ・フランスの鉄道の写真〉

ドイツ・ベルリン大会で紹介されていた資料

世界会議では、各国の教育、就労、地域生活に必要な情報などが、冊子やパンフレット、映像（DVD）などの形で、共有されます。

大会参加者は、こうした資料を自国に持ち帰って、障害福祉の向上につなげることができるのです。ここでは、大会で紹介された資料の一部を紹介します。

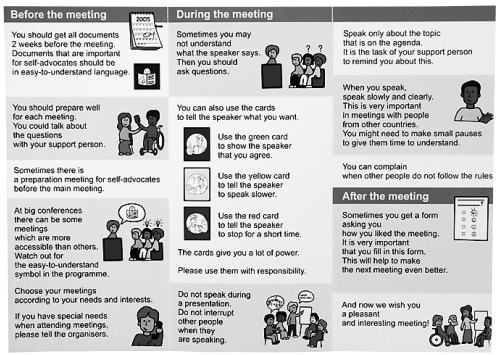
『What is self advocacy?（セルフアドボカシーってなに？）』ニュージーランド育成会



開いてみると

本人活動とは、どんなことかわかりやすく書いてあります。

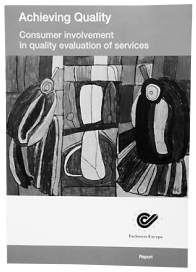
『Rules for Meetings and Conferences（会議のルール）』ヨーロッパ育成会



開いてみると

参加しやすい会議のために、会議の前、会議の間、会議の後にすることが、書いてあります。

『Achieving Quality（サービスの質の向上をめざして）』ヨーロッパ育成会



『Information for all（あらゆる人にとっての情報）』ヨーロッパ育成会

『Plain–e（わかりやすいインターネット）』フィンランド知的障害者協会

あけぼの～つながりと安心の世界に向けて

社会福祉法人藤沢育成会
小林　博

◆新たな価値観と連帯の輪がベルリンに

国際育成会連盟ベルリン世界大会は、2010年6月15日から19日にかけて開催されました。時を同じくして、南アフリカでサッカーのワールドカップが開かれていました。ワールドカップが「競う」ことで人々を結びつけ、世界の国々に一体感と熱狂をもたらしていたとすれば、ドイツ・ベルリン大会は「信じる」ことが人々を結びつけ、会場に集う人々に安心感と信頼をしみじみと味あわせてくれました。

ベルリン郊外のエストレル・コンヴェンション・センターを貸し切って、世界中から集まった人たちが交流し、討論し、新たな連帯の輪を広げていました。会期の5日間、会場にいる間中、私は日常生活では決して味わったことのない、平和で穏やかな気分にずっと包み込まれていたように感じます。気構えや恥じらい、てらいもなく、もちろん猜疑心や恐怖心など決してもつことなく、参加者約2700人の異国の者同士が、同じ空間を共有している。そこからかもし出される、とても心地よい安心感と信頼感。これは、国境を越えて集まった知的障害をもつと言われる、参加者約800人の人たちがいるからこそ、創出することのできた、一つの新しい世界なのだと思えました。

◆柔らかくて心地よい熱気

大会のテーマは「障害者権利条約を使って実現すべき変革の課題を確認すること」です。日本でも批准の準備が進んでいる障害者権利条約をめぐって、5日間で6つの全体会、26の分科会、36のワークショップが行われ、活発な議論が交わされました。「家族と本人が一緒に活動して、障害者の権利条約を実現しよう」などの主要な全体会は、知的障害をもつ本人たちが司会進行を務め、会場から巧みに意見を引き出しながら、見事な進行を演出していました。

ニュージーランドの本人活動のリーダーが、「私は知的障害者です。知的障害者であることと本人活動を行っていることに誇りと自信をもっています」と2000人以上の聴衆

を前に堂々と宣言していたのが、強く印象に残りました。本人たちの力が確実に世界を動かしている、そう確信することができた一幕だったと思います。

私自身は、関心のあるテーマに従って全体会、分科会、ワークショップを渡り鳥のように飛び回りました。日本語の同時通訳のついている会場は限られていたし、英語の同時通訳のみ、場合によってはそれもなく、ドイツ語だけという会場もありました。普段なら臆して入れないような会場にも、ためらうことなく足を運びました。会場全体に漂う、フレンドリーな雰囲気が、言葉の壁を軽やかに越えさせてくれたのです。

たとえば、テーマに惹かれて「入所施設から地域生活へ」の分科会会場に入りました。英語の同時通訳なし、ドイツ語だけの発表です。会場にいる当事者の人から手が上がり、質問が始まり、言葉はたどたどしいですが、一生懸命尋ねているようすがわかります。回答者も誠実に答えています。ドイツ語だから意味はわかりませんが、でも「雰囲気で、言っていることはわかる」と断言してしまってもいいくらい、その空間には、通常の言葉や意味の理解を超えた、つながりがあったように思います。

同じようにして、「自己決定と本人が守られることとは、両立するか」「支援付き意思決定について」の分科会に参加しました。こちらは、英語の同時通訳付きなので、多少は理解できました。特に、「supported decision-making（支援付き意思決定）」の考え方は、権利侵害的な代行主義に基づく現行の成年後見制度に根本的な批判をもたらすものに思えました。

◆新しい世界のあけぼの

世界大会は、国家や民族、言語の障壁を越えた、つながりと安心の空間でした。現実の世界がすべて、この場のようであったらどんなに素晴らしいことか、とロマンティックに夢想もしました。しかし、こうした空間を創出していたのが、他ならぬ知的障害者と呼ばれる人たちの「非知の価値」だったとすれば、それを排除することによって、近代以降の私たちは世界のシステムを作り上げてきたとも言えます。早くて正確で不変なものにすがりつくようにして、私たちの社会は成り立っているのです。

ゆっくりで曖昧で変容するもの。私たちが反価値として排除してきたものが今、輝きを取り戻そうとしています。ドイツ・ベルリン大会の５日間に、その曙光を見た気がしました。

スウェーデンの仲間とともに（左から２番目が筆者）

鶴よ、夢と希望を世界に…

呉市手をつなぐ育成会
徳永　玲子

◆家族からの後押し

ベルリン大会への参加の誘いを受けましたが、「障害のある息子が家にいるし、家族に反対されるので、行けるはずがない」と返事をしました。しかし、踏ん切りがつかず自問自答する日が何日か続いたある日、主人と子どもたちに「ベルリン大会に参加したい。でも、息子をもいるし、迷っている」と自分の気持ちを話しました。すると、あっさり「行ってきんさい（広島弁）」と家族が口をそろえて背中を押してくれました。

大会への参加を阻む壁は、障害のあるわが子ではなく、自分自身の「心の中」にあったことを、気づかされた家族団らんのひと時でした。

クウェートから参加の父娘と共に

◆目覚める、コミュニケーション

英語が苦手な私でしたが、いきなり開会式会場で民族衣装に身を包んだアラブの人たちと目が合ってしまいました。とりあえず手は振ってみましたが「話しかけられたらどうしよう。でも、せっかく日本から来し、なんとかなるさ！」と握手の手を差し伸べ、片言の英語であいさつを交わし、障害のある子と同行していたお母さんに話しかけました。

そのお母さんからは、どこの車に乗っていますかと聞かれ、返事をする私の声に合わせるように「トヨタ・ニッサン・マツダ・スズキ」とそのお母さんも一緒に声を出して、二人して合唱する形になり、二人して大笑いしました。

民族衣装に身を包んだ当事者・家族の方たちは、言葉を使わなくてもコミュニケーションができる本当に交流が上手な人たちでした。

◆折り紙で国際交流

ちなみに、私の特技は折り紙で鶴を折る

こと。先ほどのアラブの人たちに「平和のシンボル」とその場で折りあげた鶴を、それに込めた思いとともに手渡しました。

その後、日本のブースで私が鶴を折っていると、何人かが足を止めて折った鶴を見てくれる人が増えてきて、教えてほしいと訴えてくる女性に折り紙を教えました。できあがったきれいな鶴を手に取り、彼女はうれしそうに微笑んでくれました。そして、いつの間にか人が集まってきて、即興の折り紙教室を開校していました。

それからの２日間は、各国の人たちに日本のブースで折り紙を教えながら、折った鶴を持ち帰ってもらいました。やはり国や文化が違っても、物を作る喜びは万国共通だと感じました。

◆驚きと発見

今回の大会では、「障害者の権利」という言葉のもつ意味が国によって大きく異なることに気づかされました。ある国では、生命の存続そのものを保証することを権利と言い、またある国では、その人の能力に応じた就労の場を保証したうえで、人として心豊かに生活できるような支援を受けられることを権利と言い、いろいろな解釈の仕方がされていました。

また、カナダでは、障害のある子どもと障害のない子どもに対し、基本的に物理的・心理的に分離することなく教育の場を与え、

参加者と一緒に鶴を折る徳永さん。

必要に応じ個別に対応する、いわゆるインクルーシブ教育を推進するため、日本の特別支援学校に相当する学校を廃止し、その予算を使ってインクルーシブ教育を推進しているそうです。とても大胆で、今まで考えたこともない取組みでした。

＊

大会参加が実現し、すばらしい経験をすることができました。ベルリンやパリの街並みが、私の心に素敵な歴史を刻んでくれました。大会で出会ったすべての皆さま、本当にありがとうございました。

ドイツのテレビ局から取材を受けた徳永さん。

ドイツ・ベルリン大会に参加して

社会福祉法人麦の子会・就労支援事業所ジャンプレッツ
高田　隆一

◆それぞれにとって「挑戦の旅」

6月13日から21日まで、ドイツ・ベルリンで国際育成会世界連盟の世界会議に、ジャンプレッツの利用者6名と職員4名、通訳1名と参加することになりました。

この大会で初めて海外に行く利用者さん、また、大会で発表する利用者さん、利用者さんを支援する職員と、まさにいろいろな意味で「挑戦」する旅となりました。

大会の大きなテーマが「障がい者権利条約」でした。大会の中で、ドイツの大臣が「すべての人は社会に含まれ、決定権は本人にある。日常生活に障がい者が組み込まれるように。自分で決めること、みんなの同意のもとに作られるこの条約を誇りに思ってよいと考える。すべての子が一緒に学ぶ、そうすることによって子どもは学ぶ。本から学ぶのではなく、お互いから学ぶということである」と心に響くスピーチをしていました。

日本の展示ブースにて、ジャンプレッツの仕事や生活のようすを伝える準備をしているところ

また、この会議に参加し実感したのは、当事者を含め、外国の方々の人権・権利意識が非常に高いことでした。自分自身の権利意識の低さを感じ、障がい者の方々から学び、その気持ちを汲んで、自己選択・自己決定できる支援をしなければと痛感しました。

◆参加メンバーの成長

一緒に参加したジャンプレッツ利用者の冨田さんは、本人が自分たちのことを話す「スピーカーズコーナー」で自分の生い立ちについて発表しました。発表には、カナダの当事者たちが集まり、発表後には多数の質問がありました。その中で「自立するのか？」との問いかけに、力強く「はい」と答えていた冨田さんに、この旅を通しての成長を感じました。

また、一緒に行った利用者さんたちは、海外の雰囲気や気持ちもとてもオープンになったようで、日本で作った名刺を配ったり（すべてを配り終えました）、思う存分買い物をしたり、レセプションや大会記念パーティなどで他の国の方々と写真を撮ったり、とても積極的で、日本で一緒に生活していてもあまり見ることのできない姿は、自分にとってとても印象的な出来事でした。

そして、今回のベルリン大会は、前回のメキシコ大会にも参加した、当法人の三塚勇太さんにも大変お世話になりました。長時間の飛行機内やホテル、また現地での移動など、初めて参加し不安だった利用者さんを率先して支えてくれました。

◆次回も参加したい

今回のベルリン大会を通して、この国際会議に参加できたことが非常に重要であり、今回の利用者さんたちの姿を見ても、どんどん外に（海外）アピールしていくことが重要であり、その「挑戦」を支えていく支援をしていかなければならないと改めて感じ、また世界を肌で感じることもできた大会でした。次回の開催地はまだ決まっていないそうですが、また、利用者さんと一緒に参加することができればと思います。

日本のブースに展示する準備をする高田さん

大会会場のようす

大会は会議だけではありません。
世界の本人たちが集まって楽しんでいる様子の一部をお伝えします。

音楽に合わせてダンスを楽しむ世界の仲間たち

アートの広場
みんな真剣な表情で取り組んでいます

トーキング・ウォール
それぞれの国の言葉で、思ったこと、感じたことを書きました。
誰もが見られるように、ロビーにはりだされていました

ワールドカップも開催されていました
ドイツを応援するフェイス・ペインティング

ドイツ・ベルリン大会に参加して

新発田市手をつなぐ育成会
樺沢　浩

◆すべては必要な経験

第15回国際育成会連盟世界会議は、2010年6月15日～19日、ドイツの首都ベルリンで開催されました。

74カ国約2500人が参加したこの大会には、日本からも80名を超える参加者があり、この中で私を含め新潟県新発田市から4名が参加しました。

私たち新潟勢の中で海外が初めての常木さん、高柳さんにとっては、すべてが初体験、言葉の通じない空港でのチェックイン、税関検査、ホテルのフロントでのやり取りは緊張の連続で、コミュニケーションの取れない不自由さとそれにともなう不安を大いに経験しました。しかし、これもまた、社会生活の上での必要な経験としてそれなりに勉強し楽しむことができました。

大会記念パーティにて

最初に訪れたフランス・パリ、そして大会会場のドイツ・ベルリン、オプショナルツアーで行ったドレスデンやマイセン、すべてが歴史と伝統の街といった言葉がぴったりの街並みでした。私たち日本人へあらためて古い伝統や文化の大切さを教えてくれているような、そんな雰囲気を感じさせてくれた今回の旅でした。

◆国や文化が違っても悩みは同じ

このような中で、5日間にわたって行われた今大会は、英語かドイツ語を中心に、その他はフランス語やスペイン語が交じった資料と発言の中で行われ、そのため私たち日本人には同時通訳で日本語に変換してもらえる全体会か、または分科会に参加するしか発表や発言内容を理解することができませんでした。

せっかくの世界大会も参加して聞くことの

できる分科会は同時通訳のあるごく限られたものだけでした。せめて英語だけでも理解ができていれば、もう少し世界の人たちとの距離を身近に感じることができたと思います。

15日の開会式から始まって、私たちが参加した分科会でも一貫した話題は、国連の総会で採択された「障害者の権利条約」がとても重要であるということ。また、具体的にどのような権利があるのか、そしてなぜ条約が必要なのかということでした。

特に強調していたのが、「差別されないこと」「法律によって平等に認められること」「地域の中で自分らしく生きること」「地域の学校で教育を受けること」「健康でいられること」「仕事をもつこと」などでした。

そして、知的障がいのある方たちが抱える悩みや問題は、本人はもちろんですがその家族も国は違っても、基本的には皆同じということがわかりました。「みんなと同じ学校へ」「人里離れた施設から地域へ」「親亡きあと」「自分のことは自分が決める」など、イヤホンから聞こえる同時通訳をじっと聴きながら、国によって言葉や肌の色、文化の違いがあっても、みんな同じような悩みを抱えているということが、発言者の強いメッセージから感じられました。

◆コミュニケーションができれば

18日に行われた大会記念パーティーは、お酒を飲みながら各国の参加者と楽しく触れ合うことのできる唯一の機会でした。しかし私たち日本人のグループは皆同じテーブルを囲んで談笑するだけで、積極的に他の国の人たちとコミュニケーションを取ることがありませんでした。これは他の国の人たちが、母国語に加え英語も話せる人が多いのと違って日本語だけでしかコミュニケーションが取れない日本人の特徴でもあります。そういった意味では、日本人はもっともっと英語を中心とした外国語に触れる習慣を身につける必要性があると思いました。そしてコミュニケーションが取れることによって世界との距離がぐっと近くなると思ったのは、私だけではないと思います。

新発田市手をつなぐ育成会・本人の会スマイルの常木さん（左）と高柳さん（右）。

大会の期間中、予想はしていたものの食事はすべてパンが主食で、その他ソーセージやチーズが中心の地元の料理のみ、さすがに美味しいドイツ料理も毎日では一週間が限界でした。旅の最後私たち4名の新潟県人は、帰国後の東京駅で食べた日本食（そば、カレー、かつ丼）が「やっぱ日本人はこれが一番だわ！」で、今回の旅を締め括りました。

育成会世界会議に参加して

東京都知的障害者育成会
髙橋　香

ベルリンで開催された世界会議。今回は個人的には2回目の参加でした。前回のメキシコ大会の直後に採択された国連障害者権利条約をうけ、各国でどのように障害者を取り巻く環境が変化したか、権利条約の実現に向けどのようなことがされているのかといった報告が主な内容でした。現在、権利条約は145カ国が署名し87カ国が批准しています。日本では障害者にかかわる制度の改革のための話し合い（障がい者制度改革推進会議）が行われていますが、この会議の目的を示した文章には「権利条約に沿った障害者制度の改革を行う」とはっきりと書かれています。誰もがよいサポートを受け、物質的にだけでなく、人間としての充足感を得ることができるという世界的権利の実行を達成する国の一つとして、日本もやっと歩み始めました。

◆働くをテーマにした展示

東京都知的障害者育成会からは6人の本人参加がありました。前回は参加者それぞれ将来の夢を紹介しましたが、今回はもっと具体的な紹介をしたいということになり、権利条約の27条にある「働く」ことをテーマに展示物を作成しました。参加前のアンケートでは、「この会議に参加できなくても働いている仲間はいっぱいいるよ、そんな仲間を見てもらおう」という意見が出ました。

準備する東京のメンバー

全日本手をつなぐ育成会の展示ブースを利用して
「働く」をテーマに掲示しました

楽しいやりとりのあと、仲よく写真撮影

それから不況で仕事を失った仲間や、自分の仕事の将来の不安など身近な話題もありました。そこで呼びかけにご協力いただいた施設の作品や働く姿の写真を展示しました。大変多くの人たちに見ていただくことができ、いろいろな質問も受けたようです。皆さん苦労しながらもコミュニケーションをとり、どうにか通じたと満足そうな顔で報告してくれました。部屋に戻ってからは、お互いの熱い意見交換もしたようです。

◆ドイツでの実情

知人からベルリン在住の障害のある子どもの話を聞いて欲しい人がいるので会ってくれないかという相談を受けました。ドイツに25年住んでいる相談者（日本人）の友人Aさんには10歳になる障害のあるお子さんがいます。事情がありご両親は別居、親権のある母親は病気で施設に入り成人後見人（ドイツでの表現）が付いているそうです。

お子さんのことについては後見人には何も権利がありませんので将来のことは親が決めていきます。現在、お子さんは学校の寮に入っていて週末を多忙な父親の代わりに祖母と過ごしていますが、適切な療育は家庭では難しいようです。今の学校はIQが基準に達していないので通えなくなる、日本に帰るのが良いのかドイツに住み続けるほうが良いのかといったことも悩みでした。私の知り得る範囲で日本の現状を話しながら、まさしくこれが「本人がどこで誰と暮らしたいのか」ということであると感じました。ドイツでは障害のある子も通いたい学校に通えるというのは、親の隠れた努力があってのことで、実情は厳しいという話も会議で知り合ったドイツ人のお母さんから聞かされました。

障害者の権利条約は、障害のある人のためだけではありません。自分の国の仕組みを知り、どのように実践していくか、自分たちの国でできるメカニズムを作ることがやっと歩き始めた私たちの役目です。すべての人が当たり前として持てる権利がそのまま言葉にされているのがこの条約で、障害の有無に関わらず私たち全員の権利でもあるという思いが強くなりました。

たくさんの方々にご協力いただき、素晴らしい経験ができたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。また、若い世代の職員にも、こういった貴重な経験を繋げていければと感じました。

家族・教育・共にいること

大阪手をつなぐ育成会　監事
中村　忠雄

◆インクルージョンは世界共通の目標

開会式のメッセージの中で、国際育成会連盟会長の「私たちはインクルージョンという共通言語で旅をするので、通じ合えると思います」というメッセージ、国連レベルで活躍する、三人の本人理事からの歓迎あいさつは印象的でした。特にミア・ファラーさん（レバノン）の言葉は、強く印象に残りました。翌日の朝食バイキングで、ミアさんとたまたま隣り合わせの席だったので、「インクルーシブ教育って？」と質問すると、「インクルージョンとは家族（family）のこと。家族とは教育（education）のこと。教育とは共にいること（belonging）。そして、共にいることは私たちすべてにとって必要なこと」という答えでした。家族支援、インクルーシブ教育、共にいることが大切な言葉だと、何となく納得しました。

◆大会におけるさまざまな工夫

言葉や文化の違いを越えて、コミュニケーションをとるため、いろいろな工夫があり、参考になりました。すべての会議に研修を受けた司会・進行役やアシスタントが配置され、きめ細かな支援が提供されていました。

全体会の通訳は５カ国語（日本語を含む）でした。会議のわかりやすさをAAA（わかりやすい）、AA（中くらいのわかりやすさ）、A（専門用語が多い会議）の三段階で示し、前回のメキシコ大会でも使用された、３枚のアクセシブルカードが全員に配布されました。それぞれ、「緑（わかりやすい）」「黄色（もう少しゆっくり話して」「赤（むずかしい）」と意思表示するために用いられました。会議中に、黄色のカードがたびたび上がり、司会はその都度、会議の進行を止めて、ていねいに対応されていました。これから日本の会議でも広く採用されたらいいと思いました。

この他にも、例えば、ワークショップ、アートプロジェクト（絵画制作、木彫り）、ゲーム、メッセージボード、スピーカーズ・コーナーなどがあり、大会に参加する方法は会議以外にもさまざまに用意されていました。

◆インクルーシブ教育への意見交換

大会では、インクルーシブ教育が大きく取り上げられました。世界の障害児者教育の流れは、1960年代は盲・聾・養護学校および障害児学級と、通常学級の分離（セグリゲーション）による教育。1980年代は，それらの統合（インテグレーション）、そして2000年代は包容（インクルージョン）へと中心となる概念が変化してきました。全体会・分科会での発表を聞くかぎり、可能なかぎり通常の学校での教育を進める方向だと思いましたが、中には障害児学校を直ちに廃止して、その費用を通常学校にまわせばいいという意見もあり、教育をめぐってどの国にも共通する意見交換だったと思いました。

例えば、ドイツの本人から「通常の学校へ行く権利があるというが、本当にうまくいくのか？　自分の経験ではクラス全体の足並みが遅くなり、本人も同じペースで進めないと感じてしまう」という意見や「本人の選択が大切。統合学級は好きでない。子どもの間に差別が生まれる。同じペースでないと差別される。自分で選びたい」という意見もありました。国際育成会連盟の本人理事からは「国連では、教育について各国の行政の人との交渉が一番難しかった。合理的配慮について、他国の状況を紹介してほしい」という問いかけも出されました。カナダの発表者は「改革あるのみ。一切のエクスキューズ（言い訳）はダメ」ということでした。長い歴史をもつピープル・ファースト・カナダの今後の動きに注目したいと思いました。

たくさんの仲間と共に作りあげたアートの作品

現在の包容（インクルージョン）の時代にも、分離や統合の考えは残っています。分離の時代にも、統合や包容の考えはありました。いろいろな考えがある中で、全体としてどちらの方向へ進むのかをみんなで考えているのだと思いました。

カナダなどでは、すでに次の方向として「ソーシャル・ロール・バロリゼーション」という概念が示されているそうです。これはいわゆるお客さんのように、ただ一緒にいるだけの包容でなく、有意義な活動に参加し、一定の社会的役割をもって、価値ある存在として所属することと考えられます。ミアさんたち本人のいう、ビロンギング（共にいること）に込められた願いではないかと思いました。

◆障害者の町・ベーテル

話は変わりますが、開会式の前日、ドイツで12番目に大きい都市ビーレフェルト市にあ

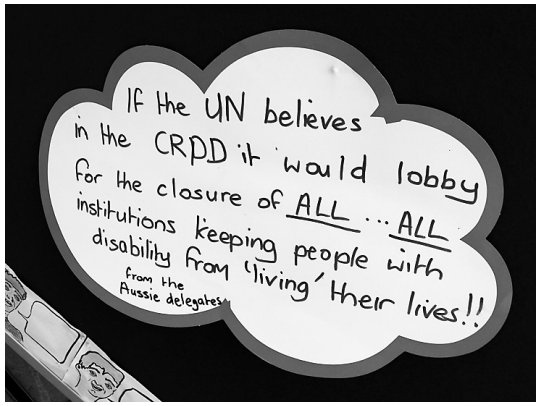
る「障害者の町　ベーテル（Bethel）」を訪問しました。ベルリンからは、ドイツ新幹線（ICE）で３時間ほどかかります。現在のベーテルは東西約2.5km、南北約1.5kmの広さです。市の中心部から徒歩10分の自然豊かなこの町で、住民6000人中、障害のある人約2000人が市民として共に暮らしています。

1967年にベーテルは創立100周年を祝っています。その当時、NHK特別取材班が、欧米の進んだ障害児教育の実態を現地取材し、「この子らのために－世界と日本の心身障害児」と題して出版し、テレビでも紹介され大きな反響をよびました。「障害者の楽園－生涯安心して暮らせる町」といわれ、すでに地域生活をめざしていました。ベーテルには、特別な出入り口も壁もありません。路面電車の駅をおりて信号を渡れば、そこがベーテルでした。一般の町と同じように、学校や商店や銀行やホテルなど何でもあります。

また、障害者の職業種目は2000種以上あり、セラピーやスポーツ、音楽、絵画、手工芸などの余暇活動も実に豊かで、生活を楽しむことを大切にしているようです。

ベーテルの正式な名前は、「ベーテル・フォン・ボーデルシュヴィング総合社会福祉施設」です。1940年ヒトラーの安楽死政策と闘い、命を賭けた闘争の歴史を持っています。「どんな人も生きるに値しない人はない」「施しより、仕事を」「手には仕事を、心には神を」などいくつかの信条が有名です。今日では、「医療と福祉の町」へと姿を変えています。社会的に弱い立場の人、高齢者、難民、ホームレスの人も受け入れ、インクルージョンの一つの実践スタイルを創造していることを知り、感動しました。

この旅行でお互いが助け合い、たくさんの経験をして、無事帰国できたことを感謝し、お礼を申し上げたいと思います。



トーキング・ウォールより：
もし国連が「障害者の権利条約」を信じているのなら、まったくすべての施設の閉鎖を求めて、政治的な働きかけをするでしょう。なぜなら施設は障害のある人々が、本当の自分たちの人生を生きることをさまたげているからです。

オーストラリア代表より

世界大会に参加して学んだこと

佐護　嘉裕

◆世界各国にあった育成会

6月15～19日にドイツのベルリンで開催された「第15回国際育成会連盟世界会議」に、今回初めて参加しました。参加するきっかけとなったのは、一足先に参加を申し込んでいた母親と知的障害のある妹から誘いを受けたことです。10日間という日程のために参加するか悩みましたが、貴重な体験ができることもあり参加を決めました。

この大会に参加するにことによって、これまで国内における育成会の存在については知っていましたが、世界規模で活動している組織であると知り、とても驚きました。また、どの国でも知的障害のある本人自らが活動に参加し、自分たちが置かれている状況を改善することに役立っている場であると感じました。そして、本大会の目的である会議に参加し、さまざまな意見を聞くとても良い体験になりましたが、この会議以外においてもさまざまな貴重な体験をすることができました。

佐護さんのお母様と妹さん。

◆障害者への対応はいろいろ

それは、福祉に対しての、国による対応の違いです。まず、フランスでの空港にて帰路のチェックインする時です。日本であれば、障害者がいる場合は飛行機の座席は、特にお願いしなくても介助を考え、そのグループの席を隣同士にしてくれますが、フランスではそうではありませんでした。介助者1人は隣の席でしたが、あとは離ればなれの席でした。フランスとドイツ間の短時間であれば問題ありませんが、日本とフランスのような長時間となると1人で介助するには大変な場合もあります。そのため、ツアーコンダクターの方と現地でのガイドさんが交渉して

大会会場で妹さんと。

くださり、やっと3人隣同士の席に変更することができました。主要な国の空港の対応はどこも同じと思っていましたが、このような違いがあったことに、大変驚きました。

次に、フランス市内を観光したときのことです。ホテルからルーヴル美術館へタクシーで移動するため、乗り場で順番待ちをしていました。その時、そこの管理人の人が私たちを見つけ、「列の一番前に行き、先に乗りなさい」と言ってくれました。しかし、日本ではこのような対応がないため、本当によいのか少し戸惑いました。

そして、ルーヴル美術館にて障害者とその介助者1名は入場料が無料ということも驚きましたが、人が多く集まる有名な展示物には、車椅子専用の見学スペースが用意してあり、日本との対応の違いをとても感じました。日本では、車椅子利用者が来たらその都度対応する所が多いですが、ここでは車椅子利用者が来るのが当たり前であり、その方達が利用しやすくしておくのが常識という雰囲気がしました。

◆ 妹の成長

ほんの1週間で、国によって福祉への取組み・考え方の違いをこれほど体験できるとは思っていませんでした。国民性や歴史の違いもあると思いますが、同じ先進国と言われる国で、ここまで差があることには正直驚きました。

今回のツアーに参加でき、本当に良かったです。そして、障害のある妹も海外旅行に行けて、世界会議に参加できたことが良い経験になったと感じます。正直、会議の内容を理解することは、言葉の違いも含め彼女にはとても難しいと思っていました。しかし、会議に参加後、自己主張が少し強くなることがあり、会議の雰囲気等から何かを感じたのかもしれません。障害が重度であるから無理と思わずに、思い切って参加し、彼女ともども良い経験となりました。

パリのエッフェル塔広場で。

この経験を日本に持ちかえって

富山県手をつなぐ育成会
廣世　節子

◆インクルージョンは世界共通

大会50周年、4年に一度の開催記念に娘と一緒に渡航しました。当日まで、日々の生活の中で、楽しみと不安が背中合わせでした。そして、全日本手をつなぐ育成会から届く『わかりやすい大会プログラム』を手に、解らないながらも親子でページをめくりました。遠かったベルリン大会と観光、フランス・パリのエッフェル塔など、目を閉じるとその情景が浮び、懐かしく思えます。

ドイツ・ベルリン大会開催記念のTシャツを買い求め、親子で着用し、帰国時、後泊したホテルで、そのマークとインクルージョンの表記を見た外国の方が「オーOK！」と声をかけて来られました。帰国し、富山へ帰省することなど片言ですが、意味が通じ、この大会やインクルージョンという言葉が世界共通であることを改めて思いうれしかったです。

◆大会中に気づいたこと

さて、参加会場では、世界の多くの人が集まり、サッカーのワールドカップ期間中でもあって、ベルリンの街自体が非常に盛り上がっていました。

本人たちのための準備会では、通訳を通じて、互いのことを知り、経験をわかちあい、名刺交換をし、友達になりたい、自分たちの考えを打ち出し学び、本人活動を通して、多くの本人が出会い、どんなことをしていけばよいのかを考え、各々の国へ持ち帰り、分かち合うことが大事であると感じました。

大会記念パーティー、観光と分科会、本人たちのアートコーナーがあり、最終日ステージ横に本人たちのすばらしい作品が展示されていました。

私の脳裏には「サービス全体がインクルージョン、インクルーシブしないといけない」「でも、インクルージョンの大切さ、インクルーシブ教育とはなんだろう」「必要なサポートとは？」など、さまざまな疑問が頭をよぎりました。ある講演の資料に「障害のある子どもを、統合教育の場に入れるという考え方から、障害の子どもがいるのは当

り前であるという考え方である」と記載されていました。

権利を守るために、本人たちの声を聞く姿勢をもつこと、また自分たちの国以外でも何とかしてあげたいと訴える人、どこの国でもメディアを通して話をし、知らせ、気づいてもらえるように努力していくなど、課題はいっぱいでした。

今後、現実を受け止め、地域に根ざしていく方向に、サポートできるように努力したいです。

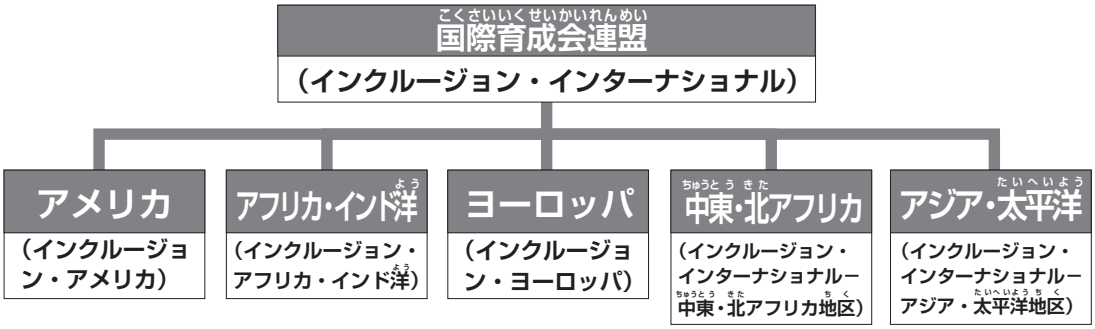
国際育成会連盟って？

国際育成会連盟とは

・知的障害のある人の権利擁護のために活動しています。
・知的障害のある人と、家族を中心としたNGOです。
・1960年設立です。現在115カ国、200以上の団体が加盟しています。
・国連で公認されている障害者団体のひとつです。
・WHO（世界保健機関）、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）、世界銀行、ILO（国際労働機関）、UNCEF（国連児童基金）などと連携します。

国際育成会連盟のビジョン

・知的障害のある人とその家族の声をひとつにします。
・尊厳、多様性、人権、インクルージョン、連帯を大切にし、促進します。
・知的障害のある人とその家族が、あらゆる点において地域生活に平等に参加することができるようにします。
・あらゆる場面におけるインクルージョン、完全な市民権、自己決定、家族支援に重点をおきます。



国際育成会連盟のURL：http：//www.inclusion−international.org/

国際育成会連盟の歴史と全日本手をつなぐ育成会の関わり

社会福祉士事務所・早稲田すぱいく　社会福祉士
松友　了

指揮者のカラヤンで有名な「ベルリン・フィル」のホールの傍に、一つの記念碑が立っていました。それは、障害のある人に『安楽死』という名の集団虐殺を行った、政府の本部があったことを示すものでした。英文で書かれた説明を読みながら、私はあふれる涙を抑えることができませんでした。今回の世界会議の中での、もっとも大きい思い出です。

◆国際育成会連盟の怒りと望みの歴史

国際育成会連盟の創立50周年記念の世界会議がベルリン（ドイツ）で開かれたことには、いろんな意味がありました。国際育成会連盟の設立は、第２次世界大戦が終わって15年目の1960年です。それはナチス・ドイツが行った集団虐殺への怒り、知的障害のある人の命を守り切れなかった反省、そして今後の闘う決意からの出発でした。そしてベルリンは、その暴虐を行ったナチス・ドイツの首都であり、『安楽死』作戦の指令本部の地だったのです。

そのため国際育成会連盟はいつも、「知的障害のある人とその家族の権利（人権）の保障」を高く掲げて運動を進めてきました。３～４年に一度開催される世界会議は、その闘う運動のもっとも重要な場であり、そこから世界に向けてさまざまなアピールが出されました。

第４回大会（エレサレム）の「知的障害者の権利について」の決議は、1971年の国連総会での「知的障害者の権利宣言」につながりました。この宣言が、後の「障害者権利宣言」や「国際障害者年」の取り組み、「障害者権利条約」の決議へとつながるのです。

「障害者権利条約」は、インクルージョンの理念で貫かれていますが、その名称（インクルージョン・インターナショナル）に示されているように、国際育成会連盟はこの理念を先取りしています。権利条約の基本理念は、まさに育成会運動の思想そのものです。国連の特別委員会では、ロバート・マーチン（ニュージランド）をはじめ、本人の理事を先頭に積極的に発言し、内容の充実と成立

へ貢献しました。その意味でも権利条約は、育成会運動が中心になって産み、育てたともいえるでしょう。

本人参加（主体）についても積極的に関わってきました。ノーマライゼーションの考えが、北欧（デンマークやスウェーデン）の育成会運動から生まれて発展したように、本人による運動である「ピープル・ファースト運動」も、育成会運動から始まったのです。

◆国際育成連盟への私たちの関わり

1972年に、全日本手をつなぐ育成会が正会員として、日本知的障害者福祉協会が準会員として加盟しました。日本からの推薦で、理事も山口薫（東京学芸大学教授、後に副会長も務める）、緒方直助（全日本手をつなぐ育成会、東京都育成会理事長）、現在は長瀬修（東京大学特任准教授）の各氏が活躍していることは、多くの人がご承知のとおりです。

世界会議は、第８回（ナイロビ）で初めての本人の正式参加を得たのですが、日本からは高名な専門家の少数の参加でした。そこで、第10回（パリ）に５人の本人を中心に、初めてグループとして参加しました。その時の衝撃が、日本の育成会運動に影響を与えました。

用語（精神薄弱）変更、権利擁護、そして地域生活支援を求める運動が高まり、自己決定（本人主権）を尊重する考えは「本人活動」を各地に生み出しました。この「パリ会議」を境に、わが国の知的障害分野は、大きく変わっていったのです。

その後、ペスト騒ぎで参加を断念した第11回（ニューデリー）を除き、日本は開催国に次いで多い参加者を送り続けています。そして、同時通訳をはじめ、参加のための支援サービスを、各方面からのご支援をいただきながら、全日本手をつなぐ育成会が担ってきました。世界の動きが、特に本人の参加者を通じて、わが国にも伝えられてきたのです。

知的障害の分野においても、「本人主体（主権）」が広まり定着したのは、ピープル・ファースト運動などの各種の動きとともに、何よりも国際育成会連盟のネットワークとの連携、特に世界会議への多数の本人参加の成果だと断言することができます。

厳しい中で日々の暮らしを営む人々にとって、「国際」とか「世界」というのは、縁のない遠い話のような気がします。しかし、これまでの国際育成会連盟の歴史とわが国の関わりを振り返ると、世界の動きが個人の生活に強く影響していることが理解できます。それは言い換えると、わが国の政策（法律・制度）や社会の意識を根本から変えるには、世界の動きと連動する必要がある、ということです。具体的には、世界会議を日本で開催することを通じて、私たちが本当に求める社会を作ることが可能である、と考えるのです。

『集団虐殺』の過去を否定し、『包み込まれる社会』を皆で実現しましょう。

表　世界会議の歴史

年	開催都市	テーマ
第1回（1961年）	ロンドン（イギリス）	――
第2回（1963年）	ブリュッセル（ベルギー）	――
第3回（1966年）	パリ（フランス）	――
第4回（1968年）	エルサレム（イスラエル）	慈善から権利へ
第5回（1972年）	モントリオール（カナダ）	世界の流れに活動を合わせよう
第6回（1975年）	ダブリン（アイルランド）	展望と優先順位
第7回（1978年）	ウイーン（オーストリア）	選択
第8回（1982年）	ナイロビ（ケニア）	パートナーシップ
第9回（1986年）	リオデジャネイロ（ブラジル）	手をつなげばできる
第10回（1990年）	パリ（フランス）	権利を現実のものに
第11回（1994年）	ニューデリー（インド）	手をつなぐ家族すべてを支える地域
第12回（1998年）	ハーグ（オランダ）	行動するパートナー／人権と社会的公平へ向けての行動
第13回（2002年）	メルボルン（オーストラリア）	生命！自由！安全！
第14回（2006年）	アカプルコ（メキシコ）	ともに生きる未来を創ろう／公平な世界をめざして

「手をつなぐ育成会（親の会）50年の歩み」を参考

「世界会議」と「アジア会議」

世界組織は、国際育成会連盟の姉妹団体といえる国際知的障害研究協会（ＩＡＳＳＩＤ）があります。研究団体であり、同じく４年に一度、国際学会を開催します。日本発達障害学会が、日本から正会員として加盟しています。アジア地域には、アジア知的障害福祉連盟（ＡＦＭＲ）があり、２年に一度、アジア知的障害会議（ＡＣＭＲ）が開かれます。わが国でも、これまで２回開催されました。日本の会員は、日本発達障害福祉連盟であり、福祉連盟は全日本手をつなぐ育成をはじめ、知的障害関係４団体で構成されています。ＩＡＳＳＩＤ（研究協会）のアジアの組織が設立され、同じように２年に一度の会議が開催されます（2012年には日本にて）ので、ＡＦＭＲは国際育成会連盟のアジア版と言えます。

この間、本人の参加が進み、アジア会議も変わろうとしています。2011年８月には、韓国（済州島）にて第20回会議が開催され、日本から多くの参加が期待されています。